

女子教育改善意見

一 女子教育問題研究の態度

從來我が女子教育に於ては、先づ其の研究の態度の正鵠に中らざるものゝあつたが爲に、教育の根本方針明確を缺き、其の効果の徹底せざる憾みがあつたやうである。今や世界各国に在りては、戦後に於ける國家功率増進の方策として、換言すれば、則ち其の新財源として、婦人問題を重視するに至つたことは、最も顯著なる事實である。我が國に於ても、近來識者の此の問題に注意するもの漸く多く、直接に女子教育に従事せる者亦摯實に之が研究に着手する傾向になつたことは、邦家の爲に喜ばなければならぬ。而して時代の要求に應じて採るところの研究方針如何は、實に問題の死活を決し、效果の有無、功率の増減を分つものなるが故に、最も慎重に考究することを要する、決して輕忽にすることを許さぬのである。

女子教育に對する從來の我が教育家の態度を見るに、比較的保守主義者と、比較的進歩主義者との二傾向に分れて居たのであつて、之が女子教育研究の出發點ともなり、又歸結ともなつたのである。然らば戦後の方針としては、其の孰れに従ふを可とするか。私は思ふ今後の女子教育は、單なる保守主義、單なる進歩主義の孰れにも従ふことが出來ぬ。更に廣濶にして、且つ更に適切なる理想と方法とを確立せねばならぬと。保守主義者は唯過去の歴史に順應することのみを善しとして、國情と時勢との進展を顧みなかつた嫌ひがあり、進歩主義者は又歐米に模倣することのみに急にして、本邦獨特の美點と要求とを等閑視した傾きがあつたのであるが、今日よりして之を見れば、兩者共に時代後れの舊思想であつて、以て我が國今後の隆運の源泉を涵養するに足らぬ。今次の大戦が歐米民族の思想と生活とに與へた變動は、實に劇甚なるものがあるのであるが、帝國も亦この戦争の爲に、文字通り確實に世界の日本とな

り、密接なる友邦關係の中に、文明各國と共に新時代を建造すべき機運に際會したのである。而も此の機運は帝國の歐米化を意味するに非ず、寧ろ却つて他に比類なき道德的使命を行ひ、民族的長所を發揮し、卓然特立、以て他と相協同して、世界の平和的進運を確保することを國是としなければならぬ。今後の女子教育の研究に於ては、必ずや此の要點に着眼することを要する。

之を約言するに、今日は世界の然るが如く、帝國亦極めて重大なる轉回期に際會せるものなるが故に、女子教育の研究に就いても、内明に國情を解すると共に、外廣く世界の趨勢を察し、深く過去の歴史を省ると同時に、遠く將來の進展を慮り、以て圓滿中正なる理想目的を定め、而して更に生物學心理學生理學社會學人類學其の他の進歩せる學術の各方面より研究して、其の科學的基礎の上に、確乎たる方針方法を求め來らなければならぬ。然らざれば、將來に對して有効なる改善を期し難いのである。彼の表面相容れざるが如く見ゆる保守進歩の二主義も、若し各々其の究竟の理想を追求し來らば、恐くは現在に適切に、將來に有効なる方針の一點に於て、遂に歸一せざるを得ざることを發見するであらうと思ふ。

一一 女子の人格教育と良妻賢母主義の教育

女子の特性特能を無視して、唯共通の人格を涵養すれば足れりとする議論の空疎なるが如く、女子の人格を無視し、機械的に妻母の能力のみを訓練せんとする方針も亦偏僻に過ぎたるものである。子が二十年前女子教育を企つるに當り、人として、婦人として、國民として、三方面より女子を教育せざるべからずとの主張を發表したのであるが、今日に於ても猶此の意見を支持するの必要を見るものである。

從來呼んで人格といひ、はた良妻賢母といふも、空漠たる抽象的概説に止まり、其の内容意義を明確にしなかつたが爲に、實際教育の方針方法亦徹底を缺けるものとなつたのである。同時に又兩者の教育相分離する弊害を誘致したのである。今後は先づ此の問題に科學的研究を加へて、確實なる根據を捉らへ、兩者の密接不離なる關係を有するものなるを明にせざるべからずと思ふ。

抑も人格とは外より附加又は刻畫するを得べきものに非らずして、各自の内部より成長發展し來るものである。即ち生得の稟賦、種族的の遺傳、國民的の遺傳、家系の遺傳、父母よりの遺傳等、各種の遺傳的性能の混合して成れる各自の適性本能が、それ／＼特殊の境遇事情に反應適合せる統一力を指して人格といふのである。然るに此の中には當然女子特殊の性能も含まれ居るものなるが故に、人格と女性とは、實際に於て各別に存在するのではない。従つて女子の人格教育と女性教育乃至は良妻賢母教育とは密接不離の關係を有すべきもので、決して引き離して各別に行ふべきものではない。若し此の原則に違へば、其の教育は必ず失敗を免れないのである。故に女子教育の適切なる方針を得んが爲には、先づ女子の性情を科學的に研究して其の特質を明にし、其の中に人格の萌芽を發見して、以て圓滿なる教育を施さなければならぬ。

女子の研究方針

婦人の人格に留意して、之を尊重し、婦人の幸福と家庭の幸福とを同一視し、又婦人の人格發展と國家の發展との間に密接不離の關係ありとなすに至れるは近代の事に屬するのであつて、東西歴史の記録せる事實は、多く婦人を奴隸として取扱へることを示してゐる。今日に於ても、低級文明國には猶其の遺風を存してゐる。又今回の大戦争の結果として、婦人も男子に代つて社會の各方面に働く力を有することを明にしたのであるが、併し此は婦人の能力の全部を示したるものに非ず、又其の最善を現はしたるに非ず、唯從來消極に偏したる反面未知數の一部を發露したりと

いふに止まるのであつて、境遇と事情との如何に依つては、男子の職分を補足するを得ることを教へたまでである。而も此の事實は、婦人と男子との活動性能に差別なきことを證明したのでなくして、却つて婦人の性能が男子と異なる方面に發達するの有理なるを示してゐるのである。是れ今後の女子教育は婦人の眞の特質性能を發見して、之を涵養發揮せしむるに在りとする原則に對し、有力なる助言といふべきである。

女子の天性特能を明にして、之が涵養發揮を通じて、其の人格的發達を計るといふのは、從來の良妻賢母主義と實質に於て同一方向に屬するものなれども、併し偏僻せる機械的良妻賢母主義の如く、消極的且つ狹隘なるものではない、又習俗的且つ曖昧なるものではない。更に廣き見地に立つて、而も精確なる科學的研究を要求するのである。殊に從來本邦婦人の多數が全然男子に隸屬して寄生々活を營みたる結果、遊惰安逸を以て本分となし、勞働力作せざるを以て上品高尚と心得たる弊習を根本より打破し、人生勞作せずして生くるの道なく、其の方面と様式とは男子と異なるも、等しく勞働力作して、以て其の特殊の使命天職を行ふべきを教へなければならぬ。

要するに、女子は決して男子と同じからず、而も男子に劣るものに非ず、又女子が覺醒して男子の隸屬を脱すとは、必ずしも男子と競争を開始するの謂ひに非ず、男子の領分に侵入するを意味せず。女子が其の職分を積極的に盡すとは、男子の完全を期するに非ず、男子の修養の道程に追隨せんとするに非ず。女子の特殊の性能素質に基きて、女性としての完全を期し、適材を以て適處に就いて、社會に於て男子の爲し得ざる一方面を引き受け、自性の自覺と、男子に對する理解とを以て、更に緊密に男子と協力するを期するのである。即ち進歩の要件たる分化と統一とを、更に緊密に且つ確實に男女間に行はしめんとするのである。

十九世紀は科學の世紀にして、同時に男子の世紀であつた。男子の手に依る科學の進歩は實に目ざましく、文明と共に女子の世界も著く開拓せられたのであるが、其の反面に大缺陷を残したのである。即ち人類が本能的に追求する

精神界の生活を蔑視するに至り、之に對する無能力を示したのである。吾人の生活界には無形の世界と有形の世界、潜在の世界と顯在の世界がある。十九世紀の科學的男子文明は遂に此の無形の靈界を開拓し得ず、其の弊害の積重するところ、遂に今次の大戦の如き大破綻を來したのである。此の殘されたる世界を開拓して、其の精神文明を作り出すことは婦人の特能に俟つの外はない。女子の性能は直觀的、演繹的、感情的、應用的、實行的、宗教的、神秘的にして、潜在無形の精神界に脚を投じ、之を闡明し來る資格を具有せるが故に、此の特長を涵養して、十分に其の能力を發揮せしむれば、以て從來文明の缺陷を補ひ、完美なる文明を將來に産出し、社會國家家庭及び男子の慶福を増進すべきを疑はない。而して之が爲には、從來の曖昧なる常識的見解に甘んぜず、最も嚴密精確なる女性研究を必要とするのである。

三 女子の人格教育と専門教育

人格教育は普通教育又は教養 (Culture) とも呼ばれ、専門教育に對しては基礎教育の意味にも用ゐられてゐる。専門教育は幼兒時代には遊戲、兒童時代には應用訓練發表等、少年時代には手工に於てその萌芽を致し、漸次生長するに従つて職業教育、實業教育、専門教育等と稱せられるのであつて、此は生れてより死に至る人の一生に伴ひて進歩發展し、其の意義と形式との複雑深遠を加へ來るのである。殊に高等教育に至つて、天賦性能の發展の意味を加へ、依つて天職なる言葉を用ふるのである。而して又科學に對しては實用 Practice と稱する。

人格教育を重んずる人の間には、職業教育の價値を認識せず、且つ人格教育と相容れざるもの、如く考ふるもの往々にして存するけれども、此は淺薄なる謬見と言はねばならぬ。人格教育は専門教育の基礎又は生命にして、又專

門教育は人格教育の骨をなし、肉を爲すものであるから、兩者は生涯平行して相互補足を爲さねばならぬ。其の一を缺けば、その教育は孰れも必ず失敗に終るのである。兩者の關係を具體的にいへば、自己生涯の職業として選擇したる作業は即ち専門であつて、其の他の専門科目を己の専門の補助科として或は己の興味上修養上より選擇したる學科は己の専門の基礎科となり、準備科となる。普通教育、修養教育の科目である。然るに我が國の女子教育に於ては、この専門の教育、實効の教育の徹底を得ざるが爲に、他面人格の教育まで、其の内容の空疎を來するのである。故に家庭教育、幼稚園教育より高等教育に至るまで、此の兩方面の教育の徹底と調和とを計ることを以て、最大喫緊事とするのである。而して此の改善方法を論ずるに就いては、兩者の關係聯絡を考へ、其の教育的意義を明にする必要を見る。

普通教育即ち人格教育に於ては、人の動機（原動力）、思考（科學）、實行（職業）の三要素常に相伴隨し、教育の三位一體を爲せるものであつて、其の一を缺く時は、直に他の二者に影響を與へ、延いて教育全體の生命を傷害するのである。女子教育も亦固より此の原則に依つて行はなければならぬ。即ち女子の人格教育に於ても、亦其の職業教育天分教育に於ても、各人の遺傳性、本能、根本要求、趣味、適性、其の幸福の種類、満足の前後の状態等を見て、そこに彼等の人格の萌芽、天賦性能の種子を發見し、其の原動力を涵養することに端緒を置かなくてはならぬ。其の方法は

第一、天賦の性能を其の特殊の境遇事情に反應活動せしむる良習慣を養ふ事

一部の幸福、一時の快樂を貪りて満足し、低劣なる目的を遂げんが爲に利己的動作に走るはこれ品性人格を墮落せしむる所以なるを覺り、理想的の善、至上の價值、究竟の目的、乃至信念に對する憧憬要求を充たさんが爲に勞働力作するが如き品性を養ひ、向上發展以て人格を完成する習慣を作らしめなければならぬ。

第二、天職選擇の第一要義

天職の要義は奉仕といふことである。故に若し専門職業にして、奉仕献身の意味なく、衣食住の爲に、財産を獲得せんが爲にのみ選擇せられる時には、それは既に天職ではない。功利的打算に依らず、吾人が生れ來りたる使命を自覺し、其の使命を行ふことに依りて家庭國家社會に奉仕し、世界人類に貢献し、以て理想的善の根本要求を満足せしめんが爲の生ける活動を導く作業を天職といふのである。奉仕の精神を以て、我が渾身の力、最大の努力、最上の智慧、最純の情操を天分使命の一點に集中せんが爲に、終生の仕事を選擇すること、之れ即ち天職選擇の第一要義である。

第三、天職選擇の第二要義

前述の第一要義は萬人に對して基準となるべき普遍的永久的原則であるが、更に各人が實際に其の事業を定めるに當つて、茲に第二要義ともいふべき要件を顧みなければならぬ。其の要件とは、一、各人獨特の要求を自覺すること、二、其の要求を充實する爲めに選擇したる業務を遂行するに足る才能を具有すること、是れである。人は皆此の二要件を顧みて最適の職業を的確に決定し、以て終生の生活方針を立て、人格發展の中心要務とせねばならぬ。人にして若し此の終生の事業を有せず、自己の使命に對する熱烈なる信念起るに非れば、何事も眞の成功を齎らすことなく、其の境遇は開拓せられず、失敗の一生を送らねばならぬ。

故に教育者は勿論、既に自己を反省する年齢に達したる青年は、各自其の健康才能性向趣味等を觀察して、速かに且つ的確に其の終生の天職を決定し、之に必要な教養に力むることを要する。若し此を怠らば、其の結果、社會に於ける自己人格の根據を得ずして、精神的浮浪者となり、或は自己の運命を悲觀して、自暴自棄に陥り、或は夫婦の選擇を誤りて、暗黒なる家庭を作り、兒童の教養にも失敗するのである。個人的又社會的の此の不幸災害を救濟する

道は、實に最初に於て、各自の個性を明にし、其の使命を自覺するに在る。

第四、天職の準備と訓練

各自天賦の性能を發見し、其の天職を選択するも、若し此に適應する良習を養ひ、其の適能を訓練する努力を怠らば、其の性能を有効に發展せしむるを得ず、遂に貴重なる天才を枯死せしむるにも至るのである。而して此の天職に對する準備訓練は、家庭幼稚園に在りては遊戲に於てし、小學校中學校に在りは手工及び家事科に於てし、實業學校に在りては、職業教育に於てし、高等なる諸學校に在りては専門教育に依つて爲すのである。之に關する具體案は之を後段に於て論述すべきも、とにかく終生の事業の爲に天賦の性能を有効に發達せしむる道は教育に依るの外なく、而して其の功率増進の程度は、其の教育の適否と努力の如何とに應ずるのである。

第五、天職と科學

過去人類生活の遺産なる知識を、人類の遺傳たる天賦の性能を以て受納繼承し、尙進んで科學を研究し、未知數に屬する新經驗を創始し、現在の習慣風俗を改善するは、生活の社會的意義を充實し、文明を進むる所以にして、人格發展の爲にも亦缺くべからざる方針である。従つて吾人の職業を有効にするが爲に人類經驗の組織的知識即ち科學の研究を忽にしてはならぬのである。吾人は先に天職の遂行人格の發展に關し、内容上、動機、思考、實行の三要素を擧げたるが、之を心理的に言へば、感情方面に於ては要求と満足との複雑なる要素を統一して、動機の組織を爲し、意志の方面に於ては實行の組織を立て、思考の方面に於ては、科學を作り、三者相助けて社會國家人生の幸福を増すのであつて、今後の女子教育の中心問題を解決するに必要な要件たることを信ずるのである。

女性の教育と家庭と學校との聯絡

凡そ母たるもの、保姆たるものは、幼稚園時代に於ける男女兒童心理を研究し、女兒に適應する教育を施さなければ

ばならぬ。幼児時代には、何事も大人の言行を模倣して、之を遊戯に表出する傾向がある。殊に女兒に在りては、此の時代に種々の仕事に依つて母を助けんとする同情を起すものである。大人の見たる遊戯は、兒童にとりては仕事なるが故に、兒童時代に於ける彼等の行動は後年の職業教育の素質であつて、生涯の發達に對し甚だ重要な價值を有するのである。又兒童は好奇心盛にして、包装を解き、容器の蓋を取り、器具を破り、種々の物品を探し出して喜ぶ等の事を爲すものなるが、これ蓋し科學的研究の發端にして、彼は斯くて自己の接觸する事物人格を觀察し、自己と周囲との關係を知り、他人の間に自己を發表する能力を自覺し、種々の生ける經驗を積みみて、遂に複雑なる社會關係を曉るに至るのである。

此の時代に在りては、兒童は自己に最も近き團體に反應する。即ち總ての興味は家庭に集中するものである。家人家番等に對する同情親昵は彼の性能に良感化を與ふる有力なる要件であるから、兒童をして成るべく其の周圍に接觸せしめ、適當なる作業に依りて、學問の興味と活氣とを刺戟せんことを要するのである。

幼稚園小學校女學校は家庭と密接なる關係を保つことに依りて、其の教育を有効にすることができるのである。適性主義乃至自動主義の教育に缺くべからざる學風は、實驗的研究を主とすることであるが、殊に女兒の教育に於ては、學理と實驗、學科と實際、研究と實行との調和を重んじなければならぬ。而して學校の作業に於て、事物研究の熱心を喚起するに力ある一の方法は出來得る限りに於て、家庭と聯絡して、家庭又女兒の中心觀念たる母、團樂、家庭の共同生活等を以て、學科の中心とすることである。此を出發點として次第に關係興味を擴めて、家庭以外の共同生活に移ると共に、其の知識經驗を自動的に發展せしむるに力むれば、此に依りて天賦の性能を絶えず刺戟し、學級課程の進むに従ひ、國家社會より、遂に世界の關係に自己を擴大し、總ての知識と文明とに反應するに至るのである。而して此の如く社會關係と共に生活内容の擴めらるゝにつれて、女子の特殊的性能の一たる社會本能、犧牲奉仕

の傾向現はれ来り、品性の秩序的發達と共に、次第に理想的人格の完成に進むのである。

特に婦人の生活をして最意義あらしむるものは『奉仕する』といふことである。―彼が其の家庭に於て、又國家に於ける國民として、又社會の一員として―何れの場合にも、婦人は徹頭徹尾この奉仕の生活を營むものであらねばならぬ。

そこで、吾人が主張せんと欲する所のものはこの女子教育に就て今後は「學校をして一大家庭たらしめよ」といふことである。何となれば、奉仕の生活を知らしむるには單に教室内に於て、又教科書のみにて依て教へらるべきものではない。それ故學校に於て國民教育といひ又社會教育といふも、唯其主義方針を教授するといふのみではなく實際その生活を爲さしめなければならぬ。言葉の上の教育、言葉の上の知識のみでは實生活には何の價値もないのである。その知識は行となり、其の行は人格の表現となつて、初て國民として又社會の一員としての生活の價値を見出すのである。即ち學校はこの生活の試練を積む所でなければならぬ。その教育は即ち人間の生活の指導改善でなければならぬ。この意味から余は又「學校は社會及國家の縮圖ならざるべからず」と主張するものである。學校は國民及び社會の一員として如何に生活すべきかの訓練を爲すべき所である。

されば、この生活の中心點ともいふべきものを何處に見出すかといふと、それはいふ迄もなく家庭である。

何人と雖も家庭は有形無形にその人その生活の中心點である。さうして學校、さうして社會、さうして國家世界的の生活に擴大して行くのである。そこで、今後の女子教育は、この家庭を中心とした教育、尙一步進めていへば、所謂家政學を重要點として教育系統を作り、其處に知識の統一を計り、其處に人格の擴大進歩を計つて行く。即ち一大家庭たる學校は更にこの家庭を中心として自動的職責分擔、自治的奉仕の生活を學ばしむるのである。

これやがて國家、社會に盡すべき自治、分擔、奉仕の生活準備であつて、即ちこの生活を擴大すれば直に國民將た

社會の一員として團體的奉仕の生活を營み得べき人格の素養を爲しつゝあるものである。所謂「學校は國家社會の縮圖である」といふ所以は此所に在るのである。

要するに學問は實地と離すことは出来ない。學校は日常生活の訓練の場所でなければならない。

參考實例

私立日本女子大學校に於ける寮舎生活を中心とした共同的自治校風は、とりも直さず茲に所謂「學校は一大家庭であつて同時に又社會國家の縮圖である」といふことを具體的に説明するものである。故に、余はこれをこの場合に於ける參考として左にその寮舎組織に就て略記しようと思ふ。

現今の私立日本女子大學校に於ては二十一棟の寮舎を開設して居る。全校の學生は大學部、附屬高等女學校、稀に小學校兒童の加入するものもあつて一のすべての學年を網羅してその各寮に分屬せしめて居る。その組織は恰も各家庭を構成するものゝやうである。

この各家庭即各寮舎は二三寮乃至數寮宛各接近寮舎の區劃に應じて各小部落を爲して居る。この小部落は又更に全寮共通の一大團體に統一せられて茲に共同的自治的生活の訓練を積んで行くのである。

即ち彼れ等は互に相扶け、互に相同情し、互に譲り互に研究して、其所に自治的寮風を作り又校風を養ひ育て、行くのである。試みに彼れ等が其の生活の目的を遂げんが爲に、開校以來今日迄、一方にはその校風を繼承し、他方には其の校風を發展せしめつゝ開拓し來りたるその歴史を顧みると、如何に其の一々の經驗が日常生活の訓練となつて居るかを知らることが出来る。

彼れ等は夙に寮舎共同購買會の必要を認めてこれを開設し、其所には組合組織の進歩的購買法が實行され、寮舎生活の食品萬事需用に應じて理想的供給法が行はれて居る。又同じ意味を以て銀行部、商業部、牧牛部、園藝部、出版部などが母校卒業の手に依つて同校内に開設され在校學生の生活に多大の便宜と經驗とを與へてゐる。

斯の如くにして學生は寮舎生活の日常に於て社會を學び國家を學び團體生活の何たるかを經驗して、其所に利己的態度を去り自ら働く習慣を養うて行くのである。

尙この外に、この學校の團體生活を有効ならしめ、又其の向上發展を計る爲に「係」の組織がある。

この組織は純然たる自治組織であつて學生は各々其の責任を分擔して居る。即ち修養係、體育係、農藝係、趣味係、整理係、衛生係、食物係等のそれである。この外に臨時消防係といふものもある。これ等の各係は學生自らの考究に依て計畫され改善されるものである。其の統一も亦學生各自の自治組織であつて所謂理想的自治的團體生活の基礎を此所に築かんとするものである。斯の如くにして學生は此所に愛國奉仕の精神を養ひ、分擔自動の習慣を作り、眞に利己的ならざる人道の精神に基く人格を構成しその生活を向上發展せしむるものである。

先年同校は不幸にして講堂の屋上より出火して不時の災事に遭遇したことがあつた。

この時、學生及教職員卒業生等は日頃の消防係の訓練と同様の態度にて健げにもかの高層上の鎮火に努めた。一方にはこの事を聞き傳へた消防隊、應援者、見舞客を以て校庭の運動場は立錐の餘地もない迄に混雜した。がこの時誰が指揮するともなく學生は一齊に各自の係りに分屬して其の責任を手分けたのであつた。消防鎮火に努むる者、避難傳令を指揮する者、應答傳達に適當なる所置を爲す者、その秩序整然として立ち働く様は男々しくも健げなものであつた。而も一人の狼狽者をも出さず一人の力の無駄もなく各々その分に應じて日頃團體生活の訓練の然らしむる所であらう。

されば、この時の出來事は災禍には違ひないけれども、一方その生活に尠からざる經驗と訓練の機會を與へたことは多としなければならぬ感があつた。

要するに、學生にとつて此の學校生活は同時に人生生活の重大なる經驗時代である。訓練時代である。此の時に於て學校と家庭、學校と國家社會の觀念をどうして別問題として取扱はれやうか。必ず其所に密接なる關係を以て生活

の交渉がなければならぬ所である。

思考及び科學

上述の如く、女子教育に於ける諸學科の教授は、知識の聯絡、統一の緊密、應用訓練の敏活を得る爲に、又學生の興味を刺戟し、學習態度の熱心を喚起せんが爲に、彼等の注意努力を家庭生活に集中せしめ、諸學科を家政學に聯絡統一せしことに依りて、其の功率を高むることが出来るのである。然るに家政學の内容を明瞭にせざれば其の關係を説明するに不便少からざれば、先づこゝに其の定義を明にせねばならぬ。

抑も家政學が歐米に於て普通教育の重要な學科目と成り、大學の一分科となつたのは、最近の事に屬し、辭書にもその定義を記載したものがない。之を概言すれば

家政學は最も幸福健全にして効力ある家庭生活に貢獻する諸有方法事物を科學的に研究する學問を包括する

のである。曾て英國劍橋女子高等師範學校長にして、今はカーヂフ大學評議員たるヒューズ女史が、先頃教育を論じたる小冊子中に、家政學を以て家庭建設の専門學と稱し、その範圍と効果とに就いて次の如く述べて居る。曰く、

此の専門學が啻に地球上最大の職業のみならず、人の幸福、健康、道德の上に影響する、如何なる職業よりも有効なることを證明する事實は、益々増加し來つた。而して此の家政の技術は他の如何なる技術よりも生活の實價值、賃銀の眞價值を高め、國家の富力に深大なる影響を與へる。故に國の娘たる女子は其の如何なる事情に在る者でも、悉く相當の家政學を學ぶべきである。而して其の大切なる技術を科學的に、有効に教ふる爲に、多大なる金と力とを費すべきである。

抑も此の技術は他の技術と全く異なる特質を有してゐる。特質とは、此の技術が他の多くの技術を綜合して成ることである。即ち此の技術は地球上總ての職業、總ての専門を含み、極めて多方面、多種類にして、人類の要務を負荷

せる、最も困難なる事業を爲すものである。又困難なる政府の事業にも關係せるものであつて、教育事業も、財政問題も、經濟、衛生、家庭社會の義務その他一切の問題を含むのである。家庭は實に一の完全なる社會であり、國家である。其の女王たる者は極めて許多の國務を見なければならぬ。女子が此の大切なる職務を全うせんとすれば、其の準備の爲に、其の性質上高等教育を必要とし、之に多大なる時と金とを費さなければならぬ。從來久しき間女子は男子と同じく教育を受くる自由を妨げられ、人爲的に職業を制限せられ、或る種の教訓學理に觸るゝことを禁ぜられてゐたのである。然れども婦人の終生事業の大部分は教育的のものにして、之が遂行は不言の祝福なりといふべきである。今や婦人の爲の吉慶日は來り、家庭建設の爲に十分なる訓練を受け、其の教育的價値の多大なる増進を見んとして居る。

右はヒューズ女史の意見であるが、家政學の價値をよく説明したものといふべきである。現在家政學の内容を次の三部門に分つことができる。

一、家庭科學

1、物理化學

2、生理學、衛生學

3、食品及營養科學

4、生物學、黴菌學

5、洗濯の學理

6、經濟學、社會學

7、食物調理製造の歴史

二、家庭管理

- 1、家庭營養及病人の食事
- 2、家庭の會計簿記
- 3、家庭事務
- 4、家庭衛生、裝飾
- 5、家族制度
- 6、修繕、改善
- 7、家族社會經濟事務の歴史
- 8、兒童保護

三、家庭技術

- 1、家屋に關する技術、家具衣服に關する意匠
- 2、裁縫、刺繡、編物、小間物
- 3、織物研究及び其の歴史、製造使用に關する研究
- 4、衣服保存の注意、繕ひ方
- 5、衣服の生理衛生學
- 6、衣服製造の歴史
- 7、家庭經濟學

以上略說せる家政學を中心として、他の學科を之に同化統一せしめ、之を家庭及學校の生活に應用せしめて、品性

の培養職業の訓練を爲さしむる方法の一端として、左に一例を擧げて参考に供する。

此の課業に於て最も大切なることは、例へば衛生方面に於ては、人の健康を支配する法則の知識を與へ、同時に

家政學と一般教育との關係一例(高等女學校二三年級)

(例 乙)		(例 甲)	
澱粉	問題	寝衣	問題
飯の焼き方	仕事	型の使用。 手縫。 ミシン使用。 簡單なる飾付。	仕事
消化作用	思考内容	夜間身體の狀態と衣服との關係	思考内容(學理)
米價、米と水の割合(一升を炊くに要する燃料及其價)	學理	切れ代	經濟
數物化生博	他學科との關係	生理。衛生。	他の學科との關係
學	學	學	學

種の有益なる職業的訓練たらしめることである。

斯の如く、家政學を中心として、學理と實地、思考と實行、又或る學科と他の學科との聯絡を密にし、知識の消
化、人格の培養に適切ならしめることを要する。

女子高等教育に於ける家政學の地位

歐米今後の女子教育が家政學に重きを置くの傾向あり、又此には十分なる理由があることは既に述べたところな
るが、高等教育に於ても亦集中點を家政學に發見せんとするは、是れ實に世界の大勢といふべきである。英國に於て
は、ヒューズ女史の言の如く、今後の女子高等教育が家政學に重きを置き、如何なる階級家庭に在るものと雖も、凡
そ女子たるものは、必ず家政學を以て學問修養の重要點たらしむべしといふ論に傾けるは事實である。米國に於ける
此の傾向は、英國よりも更に著しきを見るのである。コロンビヤ大學教授クレー女史はいふ、

州立大學農科大學の多數には、必ず家政學を其の一分科として設置するを要する。女子の高等教育に於て、男子の
大學と嚴密に同一の學科を教へざるべからずと主張する者は保守論者反家政學論者であつて、此偏見は今や敗北に
歸してゐる。東部諸州にては遅々たれども猶ほ學生の要求を容れて、家庭の建設、美化、改善進歩に關する學科を
加ふるに至るや必然である。若し大學に家庭と直接關係ある學科を加へば、高等教育を受けたる米國女子の結婚數
は從來に比し、更に多大となるであらう。世の指導者たるべき大學出身の婦人が思考と能力とを用ゐて衣食住に關
する疑問を解き、最少の時と金と力とを以て、最大の効果を家庭生活に齎らすを得ば、啻に彼等自ら其の研究に興
味を感じるのみならず、數年を費して研究したるラテン・グリーキに比して、優ることの遙に多大なる功益を人類
に貢獻するを得ることを自覺するであらう。何となれば、家政學は富の經濟學と、健康の經濟學とを目的とするも
のであるからである。

歐米に於て、家政學を學校教育に加へたるは、今より二十五年以前のこと、今日猶之を加へざるところもないではない。大學教育に於ても、修養の意義の解釋正鵠を失し、實務 Practical の方面を怠る保守主義者あり、彼等の偏見の爲に、此の生きたる訓練の進歩を妨げられてゐるのである。大學の學科中、家庭問題に關するものより重大なるは他に一もない。此の問題は實に總ての問題を蔽ふ。諸有技術と科學とは悉く家庭生活に應用せらるべきものである。今日の教育の世紀に於て大學の學科目を編制せんとする者は、必ずや此の實務科目 Practical course 即ち家政學科を逸脱することを許さぬ。人格教育に於ても、國民的訓練に於ても、必ず家庭を中心にならなければならない。功率増進を以て女子教育の要件とする以上は、家政學を以て大學教育の主要分科たらしめなければならないのである。若し此の家政學の學習にして徹底せざらんか、如何に高等の教育を行ふも、其の結果女子をして困難不幸に會せしむるを免れぬ。

家政學は社會學としても、其の科目内に家族、親族關係、家庭經營、其の他の社會生活問題の研究を含んでゐる。婦人にして家庭經濟に通ぜずして、如何にして、健全なる家庭を作り又社會を解すべきか。又近代科學の資料を有せず、之が應用を解せずして、如何にして家庭社會の改善に成功するを得べきか。實に婦人がかゝる學科に對する準備修養を有してのみ、始めてよく理想の家庭を創始するを得るのである。

吾人は如上の理由に依り、初等教育より高等教育に至り、普通教育と専門教育とを通じ、女子の天賦性能に基き、家政學を重要學科として、教養訓練せんことを主張するのである。

四 女子高等教育の必要

吾人は吾邦女子教育の不完全不徹底の病弊を救済し、將來の健全なる發達を促し、國家功率の増進を結果せんが爲に女子の高等教育の必要を力説せんと欲するのである。

(一) 子女教育の進歩と女子高等教育

文化の發達と共に子女教育の資料方法は日に月に進歩して、複雑となり、精緻となり、高尚となり、之が理解と運用との爲に、特殊多大の學識手練を修得することが必要になつて來た。今日の學校及び教師は、種々の點に於て不完全の非難を被るにも拘はらず、堂々たる一箇の専門事業として、他の家庭や個人の片手間仕事では爲し得ない事を爲し、獨特の効果を擧げて居るといふことは、疑ふべからざる眼前の事實である。然らば子女教育の事は全然之を學校に委ね、教師に任せ、家庭と婦人とは何等關心するところなくして差支がないかといふと、決して然らず、家庭と婦人との教育的任務は少しも減ずることなきのみならず、専門的なる學校教育に順應し、又之と協力して、完全なる子女發達の効果を擧げようとするには、その注意と努力とを要する分量が益々増加し來つたのである。従つて學校教育を理解し、之に協同することの出来る能力を具へることは、今日の家庭の婦人として缺くべからざる準備になつて來た。

今日の教育に關する學術と方法とは大に進歩したけれども、決して完全の域に達したとは言へない。しかのみならず、經濟及び人力の關係上、現在の學校組織と方法とは多數の學生を一時に教育するやうに出來てゐるものであつて、學生各個の心身狀態に應じ、適當なる發達を遂げしめるには必ずしも便利でないのである。其の學校及び教師すらも、常に優良なるものを選択することは容易でない。是故に學校教育の缺點を補ひ、子女の發達をして適當に且つ完全ならしめる爲には、家庭に於て多大なる注意を要するのである。

社會の進むに従ひ、子女の心身を刺戟する設備機關が著しく増加して來たる、殊に諸種の印刷物興行物等は絶えず人目を惹き、到底子女の眼をそれ等から遮斷することが出来ない。又交通の便利となり、社交の開けるに従ひ、交際往來も頻繁を加へ來るのである。斯くて、子女をして進歩せしめる刺戟も増加しつゝあるのであるが、又反對に墮落せしめる要素も著く増大して居る。總じては、特に都會に於て刺戟過度にして、神經を疲勞せしめることが多く、爲に子女の健全なる發達を害する傾向が増大しつゝあることを知らなければならぬ。此の如き時代に於て子女の教育を完全に指導してゆく爲には、母たる婦人の注意の淺薄粗笨なることを許さぬのである。

教育の進むに従ひ、子女其の人の知識も亦種々に發達する。學校より社會より與へられる兒童の知識は甚だ新奇にして、且つ複雑である。此の子女を教導せんとする家庭の婦人は、悉くその子女の知識に通ずる必要はないにしても、それを理解し、適當なる判斷選擇を加へ、子女をして之が爲に心身の健康を増すも、墮落危険の淵に臨ましめざるの用意が無くてはならぬ。然らざれば、たとへ子女に對する愛と深切とが濃厚であつても、注意の妥當を得ざるが爲に、子女の發達を傷け、或は時に子女の輕蔑を招いて、不測の禍害を貽すが如きことがないとも限らない。

此の如く考へ來れば、今後に於ける子女教育に對し、母たる婦人の具備すべき資格はなかなか重大なものであつて、之が準備なくして家庭を作るが如きは、子女に對する責任を知らざるものと斷言せねばならぬ。果して然らば、此の準備を十分に完全になさしめる爲に、現在の高等女學校を以て足れりと爲すべきであらうか。吾人は更に高等なる教育機關に待たざるべからずとするものである。

(二) 家庭生活の進歩と子女高等教育

教育の進歩普及と共に、人の生活に對する趣味嗜慾は益々發達し、家庭生活に對する註文も從つて複雑に高尚に赴

いて來てゐる。家屋にせよ、衣服にせよ、食物にせよ、裝飾にせよ、はた修養や教育の設備にせよ、總て皆舊套に安んぜずして、更に高尚にして意義あるものを要求してゐるのである。此の間に立つ主婦たる者の用意は、決して淺薄粗笨なることを許さぬ。

科學工藝等の發達の結果は、家庭生活に多大なる變化を及ぼしてゐる。電氣瓦斯等の應用だけでも、どれだけの影響を與へてゐるかを顧たならば、文明の進歩と家庭生活との關係の如何に緊密なものであるかを解することが出来るであらう。實に生活の方法に於て益々便利精緻なる發明續出し、他面には愈々複雑豐富なる材料が供給されるのである。而も此の如き文明的方法と材料とは、一面に於て頗る銳利微妙なものであるから、若し其の原理と規律とに精通せずして、徒に之を濫用する時に於ては、或は非常なる徒費となり、或は危険を醸し、寧ろ却つて文明の爲に生活を害毒されることになる。此の現象は即今寧ろ甚だ多く見られる時弊ではないかと思ふ。

社交其の他家庭と外界との交通接觸も、亦時勢と共に益々劇しくなつてゐるのであるから、此等に應酬して妥當を失はざる用意も亦決して容易なものではない。

此の如き時代に處して、家庭生活を有利に有効に導き、文明の利器をして害毒たらしめざるのみならず、十分に其の價值を發揮せしめる爲には、之に對する相等の準備を要すること論を俟たぬ。即ち家庭經營の爲に、女子の高等教育を必要とする、従つて之が十分なる機關なかるべからずとする結論に到着するは必然であるのである。

(三) 女子教育の普及徹底と女子高等教育

近年に於ける女子教育發達の趨勢を見るに、その高等女學校の教育を受けるもの、數は著しい増加を示して居る。其校數は實科を加入すれば四百以上に上らんとして居る。

右の趨勢から推せば、高等女學校生徒數が中學校生徒數に比して常に下位に在らざるのみならず、遂に或は之を超ゆるに至るべきことを豫言することが出来る。何となれば、中等實業教育機關、技藝教育機關の發達するに従ひ、男子の之に吸收せらるゝものが著しく増加すべきも女子はそれに伴はずして、普通教育を受けるものが依然として多數を占むべきであるからである。此の如く女子の中等教育が發達するときに於て、果して何時までも高等なる修養教育及び學術教育を要求しないであらうか。現在の如く極めて少數のみに止まるであらうか。

吾人の見る所に依れば、中等教育の普及するに従ひ、高等なる修養教育と學術教育とを要求する女子の數は著く増加し來るであらう。中等普通教育に満足せずして、更にそれ以上の修養と研究とを希望する女子の數が著く増加するであらう。中等教育の普及に依つて、一般社會文明の刺戟を感受することの出来るやうになつた女子が増加するに従ひ、その文明を理解し受用せんが爲に、更に高等なる教育を要望する者の多數になるべきは洵に當然のことである。

教育そのもの、發達の上から見ても、中等程度の教育の十分に發達した後に於ては、更にその上に高等教育の發達のあるべきは當然であつて、その女子に關するが爲に、此の當然の發達を沮止せざるべからざる理由は毫末もないのである。從來に於ては、多數の女子が高等教育に對し熱心なる要求を示さなかつたと共に、社會も亦必要ならずとして、寧ろ其の發達を閑却した傾きがあつたのであるが、今後に於ても長く此の傾向を續けざるべからずとするが如きは固より不自然である。且つ又社會運営の上から見ても、中等程度の教育を受けたる女子の數の増加するに従ひ、其の上に立つて指導者となるべき女子を要するに至るのは、これ又當然のことであつて、之が爲には勢ひ高等教育の準備を要するのである。現に從來中等程度の學校であつたものが、其の上に次第に二年三年の高等なる教課程を設置する傾きになつたことを見ても、女子教育の程度昂上の趨勢を窺ふことができる。而して此の趨勢は將來益々發達進

歩するものと見るのが當然である。

又前段に於て論ぜし如く、今日の高等女學校教育は、其人格教育に於ても賢母良妻教育に於ても、時代遅れて甚だ不徹底である。而して之が改善の根本方法はもう一層女子教育を向上徹底せしめるより他に道はない。

此等の點より觀察して結論すれば、女子の高等教育機關、最高等の修養と研究とを準備する女子大學の要求は、數年ならずして必ず強く起るべしと斷言せざるを得ぬ。

(四) 男子の進歩と女子高等教育

男子の活動の裡面には必ず女子の力があつて、隱然之が援助保護に當つてゐるのである。其の女子の人格識量才能の優劣如何は、男子其の人の活動に影響するところ決して少くない。思ふに今後文明の進歩するに従ひ、家庭以外の社會的事業に於て、女子の協力を要することが益々増加するであらう。女子の協力を要する事業事務の範圍の廣まるのみならず、その性質に於て高尚に精微になつてゆくのである。是の如き場合に於て、女子の學識淺く見界狭く、男子の話相手にもならず、唯其の指揮に依つて小間使の役目を務めることができるだけでは、男子の不便の上もないのである。

從來男子は女子を以て慰藉者であると見る傾きがあつた。女子は固より決して男子の慰藉者ではない、別に獨立の任務を有する獨立の人格である。併し相互的の意味に於て、即ち男子は女子の慰藉者であると同時に、女子は又異なる方面、異なる方法に於て、男子の慰藉者であるとは出来る。而して單なる慰藉者と見ても、若し女子の人格的價值が餘りに男子と隔り、其の思想感情の理解融通を缺く場合に於ては、到底十分なる慰藉の効果を擧げることができないのみならず、却て徒に邪魔者となり、煩累を増すに止まることが少くないであらう。女子が男子の慰藉者とし

ての任務を十分に盡すことの出来る爲には、どうしても男子の思想感情を理解し、適當な手段を講ずるだけの修養を積まなくてはならない。たとひ男子の慰藉者として奏効しても、世間に往々見るが如く、全く男子の玩弄品となつて、自ら覺らざるが如きに至つては、これ女子としての人格を抛棄したものであつて、墮落の甚しきものと言はなければならぬ。女子としての品格を損せずして、而も十分に男子の勞苦を慰藉し、男子の幸福を保護する爲には、必ずや相當の修養を要するのである。殊に文明が進み、男子の智徳の高まるに従ひ、玩弄物に等しき無智な女子に快樂を求めずして、思想趣味の豊富なる女子に慰藉を見出さんとする傾向が著くなつて來てゐる。文明の進歩の劇甚なる將來に於ては益々然るべきことは論を待たない。此の點に於ても、女子が高等な修養を積むべき機會の存在を必要とするのである。

女子は單に男子の慰藉者ではない、社會的には協力者であり、個人的に伴侶友朋でなければならぬ。協力者として略同等の學識才能を要するは勿論であるが、伴侶友朋としても、亦思想感情を理解し合ふことの出来る修養を要することは敢て説明するまでもない。男子の進歩の此の如く急劇なる時に當り、女子のみ獨り舊態に止まるは、實に男子の不幸のみではない、女子自身亦之が爲に不幸不快を感じなければならぬ。女子が男子の伴侶友朋として、男子に幸福を與へるのみならず、女子亦之に依つて自ら幸福快樂を得んが爲には、必ずや男子に相等する高き教育に依つて、それだけの資格能力といふものを具備しなければならぬのである。今や高等教育を受けつゝある男學生數は五六萬に達せる時に於て、大學教育を受くる女子の數の漸々増加するも、之は決して不當のことではない。

(五) 女子職業の發達と高等教育

女子が社會に出て活動する傾向は急劇に増大してゐる。此は文明の進歩に伴ふ必至の現象であつて、何者もよく之

を沮止することは出来ない。而して女子の社會的活動を促す原因は種々あるが、之を大別して二つの主要なる條件を指摘することが出来る。

その一は社會の發達の結果、その組織は緻密となり、その事務的分化が精緻となつて、女子の手を要する範圍が漸次廣まつたことである。教育衛生經濟通信工場等に於て、今日如何に女子の手を必要としてゐるか、これ等に關する諸機關から若し急に女子の手を抜き去るとすれば、縱令全く其の運轉を止めるまでに至らないとしても、甚しき澁滯を生ずることは必然である。男子を以て代へることは不可能でないにしても、女子を用ふる方が有利であるとせられる場合が多く、而して女子を有利とする仕事は益々急劇に増加してゐるのである。一定の組織機關の下に備はれて勞作してゐる女子の外、獨立して、若くは私宅に於て、同様に社會的需用の爲に活動してゐる女子の數も亦固より少數ではない。而して社會は又此等の女子の貢獻に待つところが頗る多いのである。

第二の條件は生存競争の劇烈に赴いて來ることであつて、之が爲に家庭から社會的職業に向つて驅り出される女子の數が次第に増加しつゝあるのである。現今女子にして高等な修養教育を希望する者の數が増加するよりも、職業教育を希望する者の數の著く増加しつゝある事實は、女子の生活に對する社會的刺戟の性質の何たるかを説明するものと見なければならぬ。此の傾向は將來決して緩和せられざるのみならず、益々甚しかるべきは今茲に斷言を敢てして差支なき事柄であらう。

此の如くにして、現在に於ては十人以上を使用する工場の職工中半數以上は女子であるが、十人以下の工場は又極めて多數であつて、而してその職工中女子の割合は大に増加するのである。逓信大藏鐵道院の女子事務員及醫術開業試験に及第したる女子の數、その他私立會社商店等に勞働してゐる女子の數も決して少くない。

女子の社會的活動、之を狭くしては種々の職業に従事する者が此の如く増加する以上は、兩方面の要求からして、

女子高等教育なかるべからざることゝなるのである。一は此等多數の職業に従事する女子の指導者監督者保護者となることの出来る修養を具へた女子を要するが故である。女子特有の性質を知り、その生活を解し、思想感情に同情し、衛生生理の事に、教育修養の事に、特殊の利益を計るには、必ず女子其の人の技能を借りなければならぬ部分がある。それ故女子視學官、女子工場監督官、生理衛生委員、學術講演師、説教師等の如き仕事に従事する女子は必然に要求されなければならぬと思ふ。外國には既に多くの實例があるのである。而して此の如き需用に應ずることの出来る爲には、必ずや高き修養訓練を経たる者でなければならぬ。

第二には女子の社會的活動範圍の擴張されるに従ひ、その程度も勢ひ次第に上昇して、唯職業に従事するが爲にても、高き教育を要することゝなるのである。今日でも専門學校程度の女教師、又開業免狀を受けた女醫等が次第に増加しつゝあるのであるが、此の傾向は文明の進歩と共に進歩すべきは固より明かなること、更に多言することを要せぬ。既に外國の最高學位を獲得し、更に本邦の學位を要求せんとする女子もある位で、今後は學者としても最高の研究に従事する女子が輩出し來るべきである。此等の女子の爲に修養機關たり研究機關たるべき最高學府を準備するのは、國家社會として、當然のことではないであらうか。

前述の如き進歩的時勢の現状であるから、之を狭くしては、女子の職業の品質を高め、之に従事する女子として、人格なき機械的勞働者たらざらしめ、其の正當の發達を保持せしめんが爲に、又之を廣くしては、社會的諸事業に活動する各種各階級の女子をして、流行、虚榮、浮薄、輕佻なる徒事の中に、時間を空費し、或は墮落の因を作るが如き危険を避けて、社會的に又人格的に有効なる活動を爲さしめんが爲に、高き學識品格を修養せしめる用意は今後に於て缺くべからざる政策である。従つて之が機關たる大學教育の道を開くは、女子の爲に、はた社會の爲に將來最も切要事であると信ずる。

(六) 國家の發達と女子高等教育

國家の進運は一に其の國民の善良剛健聰明達識に依存することは今更絮説を要しない事實である。實に之を歴史に見るも、亦之を現在に見るも、國民の人格の優秀といふことは、國家發展の最大資本である。畏きあたりに於て、夙に教育に御軫念あらせられ、絶えず學事を奨勵あらせられたのは、洵に其の所以があるのである。

然るに、國民の人格の優秀といふことは何に依つて得られるか。一部少数者のみ、更に言はゞ男子のみが優秀になつたとしても、女子の人格が之に伴はなければ、國民の全體が優秀になつたとはいふことができない。且つ又男と女とに關せず、凡て國民たるものは、一人として女子の身體と精神との影響を受けないものはない。全然外界思想と隔離せられた十個月間の胎内生活はいふに及ばず、爾後の保育教養、家庭に於ける共同生活、孰れとして緊密なる關係を女子の身體精神に有せぬものがあらう。果して然らば、國民の人格に於ける女子其の人の影響は極めて重大なものであつて、殆ど最も主要なる要素と言つても過言ではあるまい。従つて國家的見地に立つて男子の教育を進めると共に、女子の教育をも進め、善良剛健聰明達識の國民を教養するに足るべき母たり妻たる女子を養成することは、缺くべからざる國家的要件とせねばならぬ。

男子の教育が無限に普及する時に當つては、女子の高等教育機關も亦發達せざるべからざるは、實に極めて當然の結論である。

米國等に於ける統計に依れば、高等教育を受けたる女子の結婚率及び出産率が、然らざる女子に比して減少する傾きがある。此の傾向のあることからして、高等教育は知識の進歩には効果があるが、女子の生活的素質を劣悪にするものであると論結して、高等教育に反對するものがある。併し此の統計の結果は職業問題其の他と關聯してゐるので

あつて、單純に教育問題としてのみ解決することは不當である。又後段に於て論ずるが如く、歐米の女子高等教育の試みが男子の大學其儘を寫し、然らざれば無條件に男女共學の制を採つた爲めに女子の性能發展に注意せざりし結果に歸せねばならぬ。縱令數歩を讓つて、其が教育の結果であると假定しても、極めて少數の優秀女子が己の天職の適性を發揮する爲め、又同時に國家全般の優勝の爲に人格の量を採るべきか、又其の質を採るべきかは、餘程の問題である。結婚率出産率に多少の減少を來たしても、それを償うて遙に餘りある社會的功率を發揮することができるならば、高等教育を受けしむべきはいふまでもない。況や如何に高等教育の自由を許しても、その之を受けるものは、全國民中僅少の部分に止まるに於てをや。女子に高等教育を受けさせること、従つて大學教育の自由を與へることは、決して國家的損耗とはならないと思ふ。

(七) 社會の進歩と女子高等教育

社會の進歩を來す大きな要件は二つある。一つは社會を成してゐる各員が活動し進歩することであり、一つは社會の組織が鞏固にして、其の運用の圓滿なることである。

社會を成してゐる各員の活動進歩が、女子の活動進歩を除外して其の全きを期するべからざることとは、既に前段國家の見地からした説明に於て、明にされたことと思ふ。實に現在社會の組成員たる人として、女子の活動進歩は直に社會全體の活動進歩に大關係を有すると同時に、又社會の組成員の生産者保育者教養者として、女子の人格の價値の重大なることを何人か拒み得よう。次に社會組織の鞏固にして圓滿なることを得る爲には、その社會を成す全員の思想感情の間に理解融通を保たなくてはならぬ。然るに同じく社會を組み立て、居るところの男女の間に思想感情の理解融通を保つ爲には、其の思想感情の懸隔が多であつてはならない。略々相似たる思想感情の間には容易く理解融

通が行はれるのであるが、懸隔の餘りに甚しいもの、間には、容易に同情同感が起らない。全員を折半して各々社會の半部を占める男女間に、何の同情同感を保ち得ない社會は、遂に圓滿緊密なる結合を缺き、分裂不具の状態を示さざるを得ないのである。即ち組織の鞏固と運用の圓滿とは到底期し難いのである。

是故に社會をして圓滿完全なる進歩を爲さしめようとするには、女子をして男子と相共に互に理解し同情せしめ、共通に利害を感じしめ、協同戮力して社會の組織運用の責任を負擔することの出来る資格を具へしめなければならぬ。而して女子をして此の如き資格、此の如き力を具へしめる爲には、必ずそれに相當する教育を與へざるべからざるは固より論を俟たぬことである。男子と全然同一なる教育を受くべしと言ふに非ず、唯同程度の教育を受けることの出来る途を開き、男子が男子としての能力を自由に教養されるやうに、女子も女子としての能力を自由に教養されて、社會員としての貢獻を全くするやうにせしめなければならぬ。

今や社會は益々複雑に精緻に進んでゐるが、その社會に於ける隱然たる融和力となつて、協同一致の團體活動を有効にするものは婦人である。婦人も亦社會の進歩と共に高き教育を受けて、時代を理解し、時代に順應し、女性としての社會的任務を果して行かなければならぬ。之が爲に女子の教育が複雑にして精緻なる大學教育にまで高まるといふことは、固より當然のことで、歐米先進國の状態を見ても最早此に異議を容るべきではないと思ふ。

(八) 戦後に於ける世界の形勢と女子高等教育

近世に於ける教育の普及、産業科學藝術の發達、社會組織の複雑化等、一般文明の進歩に伴ひ、國家社會家庭の生活をして之に應じて有効有利に開展せしめんが爲に、女子と雖も文明最高の修養に與かるべき機會を有するの必要は前述の如くである。而して又此の如き事情は自然に婦人の地位の上進、活動範圍の擴張を來し、その結果婦人自ら其

の地位を保持し、利益を増進せんが爲に、益々高等の教育を要求するに至るべきは、歐米の現状を見ても知ることが出来るのである。而も此の趨勢に對し、最も重大な影響を持ち來すものは、恐らくは戦後に於ける世界進歩の形勢であらう。

大戦争後に於ては、交戦各國は精神的にも經濟上にも非常なる疲弊を來し、其の創痍の癒えない間は外に向つて活動することは爲し得ぬであらうと觀察する人もあるのであるが、多分はそれと反對に、非常なる忍苦努力の情勢と、民間に散布せられた資金と、創痍を回復せんとする苦心と、及び對手國に優勢を持せんとする欲望とは相俟つて、非常に猛烈なる世界的活動を試みるに至るであらう。又若し戦争の爲に大利を博した國があるとすれば、その有り餘る資本力を以て更に世界的の各種事業に活動するであらう。

是故に戦争の爲に或る方面には多大の創痍を残すであらうが、他面に於ては、學術産業政治教育其の他萬般の社會事業に刷新改革を加へ、進歩擴張を見るに至るべきは、恐らく期して俟つことが出来ると思ふ。而して交戦列國は戦後數年は國力充實の爲に全力を擧げて熱狂し、之が手段として海外に發展を競ふであらうし、國力の充實した後も、亦更に海外發展に力を盡すであらう。此の如くにして、戦後に於て、遠からず從來よりも更に猛烈なる平和的競争を惹起するといふことは、國民の豫期して以て準備を十分にせざるべからざるところである。

此の如き狂熱的活動、世界的競争の間に在つては、啻に男子の事業と努力の範圍とを擴大するのみではない、女子も亦近代の傾向を更に大に擴大して、家庭に於ては勿論、家庭以外社會の各組織機關の間に入りこみ、適當なる仕事を引き受け、重要な働き手として、男子を助け、國家の進歩に多大なる貢獻を加へるであらう。此は女子其の人が周圍の刺戟に感ずる自然の發動に因るのみならず、國家社會は強く之を要望するのである。勿論これとて別に目新しいことではなくて、唯從來既に爲し來つたことを、戦争の刺戟の爲に著く増大するまでである。

女子活動の範圍を擴大せんとする趨勢に對して、大なる原因となるべきものは、戰爭直接の結果である。戰術家の概測に依れば、開戦以來の人員傷害は一千數百萬を超えてゐる、而して其の中死者は三分の一乃至四分の一あるが、死者ならざるも、重傷の爲に癱疾者となつて、復完全な一人として社會に立つ能はざる男子は幾百萬を以て數ふるがあらう。戰爭の終極までには更に又幾何の増加を見るか、固より測り知らない。而して此の如く戰死傷の爲め社會から退く男子は、悉く皆選拔されたる有爲の壯年者であつて、心力に於て體力に於て一騎當千の資格を有するものであるから、社會は之が爲に活動力の缺陷を生ずること頗る多大なると共に、平生に於てすら婦人の過多なる歐洲諸國に於て、又幾百萬の婦人は、其の理想の配耦を失ふこととなるのである。其の結果として、一方に於て、其の活動力の要素を男子に失つた社會は、勢ひ其の補充を女子に向つて求めることゝなるであらう。又一方に於ては、壯年にして其の配耦を失ひ、家庭を構成する能はざるに至つた女子は、其の獨立活動の地位を、進んで社會に求めるであらう。固より男子の地位の全部を女子が補充することが出來ず、配耦を失ふ女子の全部が直に職業を社會に求めるとは限らないが、併し此の傾向は到底否み難いのである。而して又戰爭の創痍恢復に對する猛烈な努力の慾求は、國家としても、家庭としても、等く一般婦人を驅つて、社會的職業的活動に従事せしめることゝなるであらうと思ふ。況や又現時男子の出征中、凡そ女子の爲し得る仕事は、何に依らず女子が引き受けて運轉して居る習慣は、戰爭終熄と共に全然停止されることなく、必ず其の後まで殘存すべきことの明かなるに於てをや。此の如くに見來れば、戦後に於ける社會の要求と女子其の人の要求と、又現時の習慣と將來の趨勢と相合して、女子奮起の狀勢を激成し、女子の社會的活動の範圍は從來に比し、非常に擴大されて、如何なる事業にも、女子の關係し得る限りは關係することゝなり、其の活動力も亦曾て見ざる程の偉大なるものとなるであらうと思はれる。

此の如き婦人の活動範圍の擴大は、必然に又其の準備的教育の要求の擴大となつて現はれるのであるが、とにかく

婦人が活動の天地の擴大する結果として直ちに現はれるは、婦人の人格才能學識のあらゆる發達進歩である。教育の普及昂上は勿論、其の社會的地位の昂上、經濟的勢力の擴張、家庭以外社會的要素としての發達といふことが著くなことを得て、一方には直接に社會を促すと同時に、一方には其の刺戟に依つて男子の進歩を促し、又男子の活動を助け、かくて文明の進歩の上に豫期しなかつた、偉大な新勢力を加へることゝなるであらうと思ふ。女子の地位職能の昂上は、其の事だけで既に一つの社會的威力であつて、之と肩を駢べて交際すべき他の國民に對し、非常なる強味を生ずるのである。其の上に、女子の手に依つて社會の機關が運轉され、文明が産出され、直接の價値を社會の表面に樹立することになるとすれば、其の國其の社會の品質たる、甚く優秀なるものとなるべきは明である。戦前に於ける歐米には既に此の事實があつた。戦後に於ける其の傾向のすさまじさは實に思ひやられるのである。

此の如き歐洲婦人の將來に對して、本邦の女子のみ獨り舊態を維持し、晏然として長夜の夢を貪つて居て差支がないであらうか。否此の世界の大潮流中に立つ日本の社會は、依然として女子をして其の舊態に晏居せしめる程停滯不振であるものであらうか。此の如くにして日本民族の完全なる發展を各國民族の間に遂げ得るであらうか。吾人は信ず、社會員の半部たる女子を依然たる舊態に抛棄する國民は、到底他との競争に加はる態はざる跛者に外ならざるを。又日本にして若し全く鎖國政策を採つて、歐米と没交渉に別天地を開拓することが出来ると思はざればいざ知らず、既に歐米と親密なる交渉を開き、將來益々親密に交渉せざるべからざる運命にある場合に於て、本邦女子のみが彼と歩調を合はせることが出来ず、全く別世界の別生物たるが如き状態にあると思はざれば、其の結果たるや果して如何。種々の世界的共通問題は戦後益々起るであらう。各國婦人の交渉の機會は益々頻繁になるであらう。此の時に當り、我が女子が獨り對當の應酬を爲すことを得ずして、或は流行に附和雷同し、然らざれば全然路上人として傍觀する外

に何の能力もないとすれば、我が國民の品格體面、文明の價值程度に疑問を挾まれざるを得ないであらう。従つて信賴尊敬を受けることが出来ないであらう。此の如き場合に於て、國威に影響するところ固より決して少からぬものと思ふ。實に社會に伴はざる女子の停滯は實に國家社會の進歩に影響するのみならず、女子其の人を不幸にし、之に伴つて男子の不幸を醸すのである。

我が女子にして、戦後文明の世界的發展に應じ、大に進歩し活動するの必要なしとすれば則ち止む、若し其の必要ありとすれば、此に相當する準備なかるべからざることと言ふまでもない。準備とは何ぞ、即ち各種の高等なる教育修養である。育兒衛生料理其の他の衣食住に關するのみでも、現在の高等女學校程度の教育を以て満足すべからざるは勿論であるが、内は多數女子の指導者となり、外は外國婦人と協調して、國威と文明とを進めゆくべき女子としては、必ずや大學程度までの教育を要するのである。

但し前述の如く、女子が社會的に地位を進め、活動範圍を廣めることゝなれば、之が爲に種々の弊害を生ずるに至り、却つて社會の進歩を妨げるやうになりはせぬかといふ人があるであらう。吾人もそれは有り得べきことであると思ふ。現今に於ても、その弊害の惡傾向を一面に示してゐる點もある。とにかく一利一害は常に事物に伴ふ結果の兩面であつて、如何なる事物と雖も、利のみにして害なしといふことは此の社會に存在し得ない。文明教化の顯著なる進歩發展は、其の裏面に幾多の犠牲と罪惡とを潜めて居る事實を何人も否定せぬであらう。女子の進歩といふことも、亦其の價值の反面に弊害を生ずるのは、當然のこと、思はなくてはならぬ。併し其の弊害ある爲に事物の利用を避け、又文化の發達を阻止することの出来ないと同じく、女子の進歩と雖も、たとへ弊害を伴ふにしても、それが爲に之を阻止してその多大なる價值を沒了すべきではない。又此は事實上爲し得ることでない。女子の進歩は趨勢である。更に言はゞ人類的要求であり、又民族的必要である。故に弊害を恐れて、女子の教育其の他の進歩を阻止するが

如き不自然なる倒錯に陥ることなく、却つて益々女子其の人の進歩を完全にすることに依つて、又其の生活條件、社會關係を改善することに依つて、其の弊害不幸を減少する工夫を爲すべきである。此は弊害救済の最大方針であつて、又此の外に良法はない。實に女子其の人の進歩發達は社會の進歩、男子の進歩に伴ふ必至的の趨勢であつて、理論上亦爾かあるべき欲求である以上は、之を阻止せずして利導する外に道はないのである。此の必至の道に従ふのが即ち自然なのであり、而して自然は最も健全且つ有効なる方法である、更に言はゞ、最も賢明なる方法なのである。

(九) 交戰諸國の婦人狀態及び女子教育の新傾向

女子の國民教育

(女子教育研究資料として參考に供す)

「國亂則思良相、家貧則思良妻」と古語にもあるのであるが、男子も女子も、常時此の古語に應へるだけの覺悟と能力とを具へて居なければならぬ。一朝國家危急存亡の秋に際會すれば、婦人と雖も男子と等しく起つて、之に應ずるところを得るだけの準備と訓練とをして置くことは、決して奇矯な異行でない。此は大戦に臨める歐米現時の狀況を見ても、亦疑ふべからざることである。今左に歐米最近の報道を譯して、其の活教訓を紹介するは、敢て無益の徒事ならざるを信ずる。

○英國婦人と徴兵令

從來種々の理由により徴兵を免ぜられ居りし者も、今や國家の急に際しては、總て徴兵令によつて召集せらるゝこととなつた。而して國民の半數を占むる婦人は、最近まで政治的無能者であつたのであるが、今や國難の大なるを思ふと共に、男子同様政治上の位置の重きを感じ、大に覺醒してゐる有様は、實に歴史上未曾有のことと思ふ。

男子が徴兵令に依つて悉く召集せられる以上は、女子も亦縦令戰線に赴かぬまでも、等しく召集せられて、女子適

當の工業其の他に従事すべきではあるまいか。固より此の召集せられたる女子は普通工場等に私用するに非ずして、陸海軍に直屬する諸種の婦人團、或は自働隊、農業隊、看護隊の如きに従事せしめるのである。今現に此等に對して補充の要求過多にして、到底應ずるを得ざる有様であるが、其の需要は將來益々増加すべしと思ふ。具體的に言へば、女子青年會に於ては一千人、陸軍に於ては三萬人の婦人を即時に要するといふ有様である。看護婦などでも、從來の普通看護婦は今悉く戦争の方に使用せられて居るのであるが、何等かの事件、例へば流行病等が起つたとすれば、如何に處置すべきか。之に要する多數の婦人、而もそれ〴〵適當の準備教育を受けたる婦人を何處より得來らんとするか。之に依つて吾人は十八歳より三十歳に至る未婚の女子を召集して、婦人團を組織し、必要なる訓練を施し置き、以て其の急需に應ぜしめることを必要なりと思ふ。

○平和は戦争に劣らざる名譽の勝利を得たり　　フオセツト夫人

(婦人に選舉權を與へられしに對するフオセツト夫人の歡喜の辭)

平和が戦争に劣らざる名譽の勝利を得たる其の一は、婦人選舉運動の勝利といふことである。

此の選舉權運動が非常なる活動を起した原因は實に戦争である。戦争は舊世界を棄て、正義平和の新世界に對する希望を明にしたのである。そは靈によりて生れたる新しき社會關係、人生の根本的の眞意義を理解し、男子と女子、労働と資本、政黨と政黨、國家と國家との間に、正しき關係を生じ、諸有偏見の排除せられたる社會である。是までには既に靈の大なる産みの苦みがあつたのであるが、靈に由つて生るゝものは靈である。將來に對する希望を吾人に與ふるものは、實に其の信仰である。

過去三年間に於ける名狀すべからざる國家の苦難も、そは死の苦難に非ずして、産みの苦難であつた。吾等の子々孫々の爲に、更に善美なる新世界を産み出さんとする苦難であつた。此新世界に於ては、婦人が男子の共働者、好侶

件として得たる自由を、最も善く活用して、苦み、悲み、痛み、疾病なき國とするのである。

○戦時に於ける女子の商業教育

一千九百十四年前迄少數の天才的の女子商業家の外、商業界は一般の女子の働き場と思はれて居なかつたのであるが、開戦以來女子に對する此方面の需要が非常に増加したので、何の準備もなく其に應ずる女子も多くある。併し是では眞の成功は期せられぬ。先づ一時の間に合せである。従つて其賃金も男子と同等と云ふわけにはゆかぬ。茲に至つて女子にも高等の商業教育の必要が起るのである。米國では既に紐育市に於て、實際の銀行事務一切を教へた六十名の青年女子が商業國立銀行、モルガン銀行、其他同市の主要銀行の重要な位置を占めて居る。而して此教育に従事して居る婦人の熱心家はワイリー嬢とて非常の精神で青年女子を教へて居る。

ハドソン河畔にワイリー嬢が熱誠に教育し居る如く、セイネ川の近傍に於ても、佛國婦人は其必要を認めサヌア女史は巴里に於て百二十五人の女子（中流家庭の女子にして平時なれば母と共に市場に買物の稽古に行き、家に在りては裁縫位をして婚期を待つべき女子）に商業教育を施して居る。一千九百十四年前と今日とは、此等女子の考も非常な相違である。此校の生徒は専門家、醫家、法律家等其他有名なる人々の子女が多くある。又兄が戦死したので、二人の妹が其事業を繼續する爲めにとて入學した豪商の孫娘等もある。而して此校の卒業生の要求が多くて、常に斷りづめで居るとの事である。

獨逸でも近來は同様の教育を施して居る、結婚した婦人に銀行事業を決して許さぬ風習のあるベルリン市に、初めて婦人銀行を設立して世人を驚かしたフォン・ウンシユ夫人は「女子が金權を得ざる間は決して世界的勢力となる事は出来ぬ」と云うて居る。

サヌアも佛國に於て同じく女子を經濟的勢力者にしようとして教育して居るが、政府に其必要を認めしむるため

種々の困難をして居る。佛蘭西銀行では七百、貯金銀行では四百、リオン銀行では一千二百の女子を使用して居る、又サヌア女史は獨逸製の玩具を一切佛蘭西製の品で補はうとして、玩具製造團體を既に組織して居るが、首府巴里に女子商業學校の設立なきを以て、一千九百十六年に商務大臣トムソン氏に面會を求めて其必要を説いた。其時女史は「女子に商業を爲し得る能力があると思ふか」との氏の問に對して、「それは教育して後御使用あらば明かな事である。今我等の最も要求するものは學校である」と答へたとの事である。

英國では既に二十七萬八千人以上の婦人が出征した商人の後繼をなして居ると云ふ有様である。多くは火急の場合適當な準備なくして従事して居るものであるので、今政府が種々の方法により、之が速成教授を試みて居る。戰爭によりて初めて拓かれたる婦人の新開地たる實業界に於て、若し男子と同等の責任を女子も負ふものとすれば、報酬も同額を受くべきであるが、併し最も必要なるは教育である、準備なき人には決して高給を與へることは出來ぬ。

(英國婦人雜誌より抜萃)

○米國婦人の戰時事業

若し吾人の胸中に何か高尚なる聖火の燃ゆる事があらば、必ず亦吾人の事業の上にも燃ゆべしと云ふことがある。火とは熱情である。熱情なくしては、何事も創始されぬ。獨逸は不用意にもベルギーの征服者を滅亡せしめんとした。聖火を米國に燃した。自由と正義とを愛し、之に奉仕するの火、目的ある愛の火を燃した。而して此聖火は未だ嘗て米國婦人の胸に斯る光輝を放つた事のなき程に燃え上つたのである。

米國の婦人も英國の婦人に倣ひ、諸種の婦人團を組織して、時局の急に應じて居る。例せば、海軍同盟の婦人部は合衆國全部に渡りて六十萬人の會員がある、之にメーソン學園が屬して居る。此メーソン學園は女子の戰時事業の實際の準備の爲めに開始せられた最有力の學校である。其程度は學校と云ふよりも寧ろ大學と呼ぶが適當であらう、此

處では無線電信は海軍の電信技師長が教授し、兵式體操、訓練等は同じく海軍々人に、信號機、電信機、其他の同種の科目は夫々熟練の教師に教授せられ、衛生學、編物、裁縫其他赤十字の要求に應ずる教育、料理（諸種の戦時の食物）等迄の教授を受ける。

十六歳以上の米國産れの女子を收容するので、富豪の婦人も労働者の娘も一樣に熱心に國家の爲めに勉強するのである。土曜日は學校の兒童が半日の休暇を利用して、同じく此戦時教育を受けるので、此の校舍を其等の兒童の爲めに讓る事になつて居る。

米國に於ける海軍事業の爲めに設けられたる最初の女子學校は大統領ウキルソン氏によりて開かれたる特殊の學校で、同じく海軍同盟婦人部の保護を受けて居る。此校の一千九百十六年にメリーランド、シヤヴェー、チエースに開かれたのは、未だ米國が戦に参加せざる前であつた。ウキルソン大統領は斯る學校の必要を感じて、閣員及び陸海軍の高等官を從へて、其開校式に臨席せられたのである。

此學校は野營生活であつて、嚴格なる軍隊的規律が守られて居る。是も米國産の女子で十八歳以上のものゝみ收容する事になつて居る。日中は戸外に、夜はテント内に休み、午前中は兵式體操其他の授業、午後は諸種の會合及び講演等がある。

其他此に類似の學校があるが、既に千五百名の熟練なる戦事従業員を出し、其中には責任ある位置を占めて居るものも多くある。婦人自動車隊も一生懸命で研究をして居るが、此隊に屬する婦人は最も複雑なる修繕は無論の事、必要に應じては、自動車を悉く解體する事も出來ねばならぬ。其他運轉の試験、歩兵の練習も受けねばならぬ。醫術、看護の心得、練習を要する上に、身體健康、神經の是に堪へ得る者でなくてはならぬ。

其他種々な方法で困難に際する婦人の教育をなし居るが、ペンシルヴァニア鐵道會社に於ては、鐵道事務の、普通

よりも一層高等なる専門的な、責任ある部分を女子に教へて成功せし事を看落してはならぬ。(教授法は非常に懇切丁寧且つ創始的なれども之は略す)

婦人國防委員と名づくる婦人團は米國婦人戰時團體中の最大なるもので、其會員の数の多きが爲めに、亦最も有力なものである。一千九百十七年四月に本會に於て定められし意見は如何にせば米國國家的知名の婦人を集めて、米國婦人をして最も善く戰時事務を遂行する助けとなし得るやを計畫せんとこの事であつた。

アナ・ホワード・シヨウ博士(女史)が會長に選ばれたが、婦人參政權運動にて世界に其名を知られしカツト女史の如き、其他有爲知名の婦人が皆喜んで之に列なり、以て其大事業をなすのである。

之は常に中央政府と機脈を通じて居るのであるから、仕事が非常によく運ぶ。而して此團體では「競争にあらず、共同なり」と云ふのが標語である、僅かの期間に四十九州に四十八支部が組織せられし事を思へば、是が活動の如何に目醒しきかを察する事が出来る。

此團體の仕事

一、印刷物、教壇其他により戰爭の原因其他戰爭に關する事を世人に知らずする方法。

二、ワシントン中央園圃委員會は、全然素人の手によつて、五千箇所の果菜園を作り、而して其收穫の餘剰を貯藏する爲に、共同罐詰製造所を設け、何人も自由に使用することができたことにした。其の教師をば政府から派遣して、指導させたのである。

三、食物の貯藏、食物の交換、果實の貯藏等實によく學理を應用し、都市の婦人と田舎の婦人が協力して、非常な大事業を爲して居る。此婦人の協力、及び斯る大團體を組織運轉する事、且つ其仕事を創始し、遂行する事等、大なる合衆國婦人が一人の手足の如くに働く事は實に教育の非常なる効果であると思はれる。又米國は教育を重んずる

こと諸他の文明國に比して一層甚しく、事に當る前に先づ必ず其教育よりして始むる。是が凡ての事を効力あらしむる所以であらう。即ち是が米國の愈々勢力ある國となる大原因であらう。

(英國婦人千九百十八年五月號論說より抄譯)

○戰時に於る獨逸婦人の活動並に戦後の女子教育

今は米獨交戰中であるから、米國人が獨國に入る事は出来ぬが、開戰當時には唯一方から獨逸に入る事が出来た。夫れはデンマークを経て行くのであつた。自分が彼の國に行つたのは、一千九百十五年十月であつた。其時分の旅行は左のみ面倒ではなく、獨國內に入る適當の理由と、所持品其他の検査さへ受ければ夫れでよいのであつた。

ベルリンに着したのは夜の九時、馬車が得られず、辛うじて乗合自動車で、菩提樹ウシテイルデリンデ下通りのホテルに着したのは早十時であつた。旅窓から市中の様子を見ると、向ひのカフェー店には電燈が輝て居る。巡查は狭きフリードリヒ街で車馬の往來を制して居る、人出は中々多い。是が歐洲大戰を爲して居る國かと思ふ程、平時と異つた處はない様であつた。

居る事年餘、其中に米獨國交は斷絶せられる、米國は遂に參戰して、最早米國市民として彼國に長く滞在する事が困難になつて來て、同國を引上げたのは一千九百十七年七月の事であつた。此時は其國を離れる丈でも、非常な面倒な手數を経なければならなかつた。漸く無事に歸國した。家族の者は私が人質に取られたとか、米探として銃殺せられた等、種々の流言を聞て随分心配をした様であつた。併し事實は之に反して、彼の國では皆親切丁寧にして呉れた。國內に居るものは、餘り戰爭の事は云はないが、食料品を得る事に就ては、中々研究して居る。何時戰爭が終ると思ふかと問へば誰でも皆『何一二ヶ月の中には終りませう』『長くは續きませぬ』と答へる。

同國滞在中見聞した事の一二を擧ぐれば、

一、ベルリンに於ける女子の労働

獨國に於ても、英米佛の女子の如くに、女子が男子の空所を満して居る事は同じである。實に女子には何事でも出来ない事はないと云ふ有様である。此度の戰爭中、獨國の労働婦人程に困難に堪へて居るものは他にあるまいと思ふ。一家を支ふる男子は既に戰場に出てしまつた。政府は遺族に少額の手當を拂ふのみである。故に此労働者(女子)は男子の如く、然り、馬の如くに働かなければ、生きて行かれないのである。

獨逸の労働女子は非常に手工に長じて居る。疲労も知らず、終日濡れて、雪中に立ちて働く事も出来る。併し是は妻たり母たる彼等には非常に害になる。労働者仲間では、自然に其言行が粗暴になつて來るが、凡ての社會改善は種々の暴動から初まると云ふから、是も獨逸の女子に自信を持たせ、男子に依頼せず、獨立の存在を認める初歩になるのかも知れぬ。

開戦の始めに、女子は地下鐵道の切符捺印者に雇はれた。野天に終日腰掛けて居る。夏はよいが、寒天には假令厚い外套を着て、靴の上にもう一つ木製の靴を履いても、まだ非常に寒い。それでも厚紙の切符に印を捺さねばならぬから、手袋ははめられない。是で一日三マルク(一圓四五十錢)を得るのである。

次には女子戸締係と云ふ役が出來た。是は停車場に終日居つて、汽車の凡ての戸を閉ぢる役である。中々活潑な仕事で、列車の中を飛び廻つて戸を閉ぢるのである。大抵の女子は一種の股引を着して居るが、中には男子用の股引を着し其の裾を長靴の中に押込んで居る者もある。帽と徽章とを着けて居る。郵便脚夫、特別配達夫も女子がして居るが、特別配達夫は自轉車に乗つて配達して居る。

電車の車掌も半數は女子である。彼等は猶ほスカート丈は着て居るが、男子用の帽と上衣とを用ゐて居る。其車掌ぶりは中々巧者で、電車の後方に飛乗つたり、觸輪杆を直したり、必要があれば電車の屋根にも乗り、又車が動かかな

ければ押し動かすと云ふ様に、何でもする。併し此様な場合には、傍觀人も皆助けて運轉させる。又男子同様、「心付」を受ける袋をさげて居る。

女子自動車運轉手が出来、始めの内は人々は危険に思つて、「女子の運轉では自動車は危険だから決して乗らぬ」等と云ふ者もあつたが、今日では最早其様な事を言ふ者もなく、又女子が男子より多くの過失を爲したと云ふ事も無い。中には小さき女であるのに、如何して終日業に堪へるかと思はるゝ様な女子もあるが一日三マルク半を得るのである。

馬車の女馭者は少ない。ベルリンに一人老婦人の馭者が居る、凡て女子の方が「心付」を多く貰ふ處から、男子の馭者が少し嫉妬すると云ふ様な事もある。其他女に乗合自動車運轉手も少しはある。郵便車の馭者もある。窓磨きもある。

ベルリンのフリードリヒ街の新地下鐵道の道路を採掘する人夫は女子である。而してレールを敷くのも、半數は女子である。鐵のレールを切つたり鐵栓をきめたり皆彼等がするのである。

女子煙突掃除人は煙突の掃除に股引を着して、煤まぶれになつて、働いて居る。屋根直しは勿論ズボンを着して居る。

獨の軍器製造は大抵の女子がして居る。賃銀は勞働女子には嘗てなかつた破格の高價で、月給四十弗から五十弗を得て居る。従事して居る女子の力量は實に驚くべきものがある。婦人記者として、又社會殖民事業家として有名なゲルトルーデ・パウメル夫人の話に、或工場にて製造して居る彈丸は一箇八十斤の重さであるが、彼處に働いて居る女子は毎日其彈丸を三十六箇仕上げて居るとの事である。

軍器製造所では其仕事を綿密に検査し、不適當な者は他の工場へ廻される事になつて居る。工場内では、衛生の注

意はよく行届いて居る。防火は殆んど完全と云うてもよい。故に爆發等は殆どない。先づ獨逸に火事と云ふものが誠に稀である。

又ベルリンには婦人國民救濟會と云ふ會が組織されて居る。是は戦時中の貧民救濟會であつてゲルトルーデ・パウメル夫人が矢張此會長である。又同氏は獨逸婦人一年兵役問題の主唱者である。此會は女子に職業を與へて居るが、子供があつて、家を離れる事の出來ぬ女子には、砂袋(防禦の爲め)や兜の被ひ(兜が光つては敵の目につく故に被ひを覆せる)を縫はせる。若し女子が病氣になれば是を看護し、食券も貧民に與へる様な事をして居る。其他、恩給の事等も種々調査研究をして居る。

二、女子一年兵役問題

現今獨逸婦人の頭腦を充して居る問題は、選舉權ではなくて、一年兵役問題である。此度の戦争で、軍隊的訓練が男子の健康上に非常に効果のあつた事を見て、女子も將來家庭國家に對して盡すべき義務があるならば、先づ之を果すべき適當なる方法を特別に訓練せらるゝ事の必要を意識して來た處から、獨逸國家は女子を一年間特別に薰陶すべきにあらざるとの問題が起つて來た。此事に關しては、獨逸の有名なる婦人等が皆賛成して種々に其方法を講じて居る。勿論之は男子の如く武器の使用法、兵式體操の如きものを教ふるのではなくして、女子として、母としての務をもつと完全に果す爲めの教育である。

兵役年齢の女子を二組となし、一は教育もあり、社會の上級に屬するもので、費用は自辨するもの。第二は下級に屬し、生活費の必要なるものとする。是は社會の位置に従ひ、自然教ふべき科目も異なるからである。

第一級は自費生で、其一年間住まふ建物も、設備も充分である様にし、官費生は衣服費、食料、授業料共給與せられ、公立學校で教授せられるのである。

斯る女子の學ぶべき課目は、

第一、家事―掃除、家の整理等、料理―病人、小兒の食物迄、洗濯、火熨斗、ベットの作り方、學理的の買物の仕方、代用食品の調理法、食品不足の時の種々の献立、田園栽培法、養鶏、牛乳搾等。

第二、育兒法、小兒の被服、食物、看護法等を教へ又貧民殖民事業も教へて、貧民孤兒の扱ひ方、或は幼稚園保姆の仕事も教ふる。

第三、其他レース等の美術も上流の女子には教ふる必要がある。又貧兒に與ふる衣服の裁縫等も教ふる。

或は兵役に服する一年間を二期に分ち、前半期は小學校を終りたる後十四歳の時、後半期は十七歳より二十歳迄の便宜の時に服役するが便利であらうと考へる婦人もある。

上流社會の女子には、育兒、看護、裁縫、料理等が主要科目であるが、下級の女子には職業教育が必要であるから、簿記、タイプライタ、電信電話等好みに應じて教授する必要がある。勿論獨逸の女子は結婚するのであるが是戰時或は夫の死亡等で、保護者なき時の準備である。國費によりて斯く教育せられた女子は、國家の必要の時には召集せられ、國事に盡す事は男子同様である。

今日の計畫では、總ての事を女子が管理し、軍隊と同じく、士官を置いて凡て軍隊組織にすると云ふ事である。斯くして聰明な女子は一層有効に働き、鈍なるものも命令に服従する事を習ひ得ると云ふ考である。

或社交的婦人等は既にクラブを組織して斯る教育を爲し初めて居る。此一年間の服役により、女子が利益を受くる事は疑ふ可らざることであつて必ず身心共に健全に強壯になる事であらう、此世界の大戦は軍隊教育の如何に男子に必要なかを最も能く説明した故に、獨逸女子は、若し今後男子の業まで引受くべきものならば男子同様、軍隊教育の恩恵を受けねばならぬと云ふ考である。

三、女 軍 人

此度の戦争程多くの女子が出征して居る事はないと思ふ。ロシヤ、ガリシア、ハンガリー、セルビア、モンテネグロ等に於て、無数の女子が戦線に立つて働いて居る。彼等は男子同様困難に堪へ、粗食に慣れ一言の怨言もなく、六ヶしい仕事をして居る。彼等の胸には皆愛國の焰が燃えて居る。併し彼等を驅つて戦場に往かしめし重なる原因は夫に對する愛が多いやうである。

東部諸國では、農家の女子は男子の仕事をして居る。彼等は耕作、大工、土方の仕事迄を爲して居る。されば彼等には戦争することも一向不自然ではない。露國の女軍で多くの捕虜になつた者があるが男兵と更に見分けがつかぬ程である。

獨政府は女子の從軍を禁じて居るが、時々男装して女性なることの發見せらるゝ迄戦つた者が尠くない。佛國にも少數同様の婦人があるが、英國では女子砲兵聯隊を組織して居る。セルビアでは開戦當時から決死女軍を編制して盛に活動した。澳、匈、露の軍では女子は伍長、軍曹等に進み、其武功の爲、勳章をも受けて居る者も尠くない。

此度の戦争で最有名なる女勇者はオーストリアのオーガスタ大女公即ちヨセフ大公妃である。伊太利が參戰して以來、大女公は附屬の聯隊を率ゐて、常に伊澳戦線の方に在つた。兜を戴き劍を持し馬に跨りて聊かも男子と異る所がなかつた。夫君大公も大に之を喜び、同妃の活動を獎勵せらるゝとの事である。

ヴェーナでエリザベット・ローレンツといふが又中々有名である。此の人はアドルフ・ローレンツといふ有名な外科醫の夫人である。是も夫を助ける爲に戦場に出で赤十字の車を驅つて戦線を往來し功をたて、フランツ・ヨセフ皇帝の薨去前に勳章を受けたのであつた。

次に、ローザ・ツエノホといふ十二歳のオーストリアの農家の少女があつた。彼はラワルスカの戦の時斬壕の兵士

に水を運んで居つたが戦の眞最中路傍に倒れて居るハンガリーの負傷兵に一杯の水を與へんとして其傍に爆發した彈丸の爲に大負傷をした。直に病院車で首府ヴィーナに後送せらるゝのであつたが、途中遂に其足を切斷するの止むなきに至つた。皇帝は之を聞き召してダイヤ入りの金の帶と一萬クローン(四千圓)に新擬足を賜つたとの事である。

獨逸婦人で男装して戦うたのはマリア・バルカといふ婦人であつた。初め露人が西部プロシヤのメメルへ侵入した時、夫マツクス・バルカは戦死した。其の殺さるゝ有様を目撃して怨骨髄に徹した彼は、何でもこの仇を報ひねばならぬと決心し男装して入營したのであつた。が誰も之れを女と知る者もなく良き兵士とのみ思はれて居つた。而して下士官から軍曹へと昇進した。又選拔された五人の射手の中の第一人として勳章を得た事もあつた。コフノの戦で二萬人の露軍が捕虜となつた。マリア・バルカは二名の下士と十名の兵士と共に其の中の一千人をカンブリネンに護送することを命ぜられた。處が汽車がないので徒歩せねばならぬ事であつた。軍律は嚴である、一人たりとも列を脱する者があつたら銃殺せよとの事で恩惠の沙汰はないのである。

ピルウイスキイという村で一つの小屋の前を通過する時、一人の農夫の妻が小兒を抱て戸口に立つて居つたが捕虜の通るのを見て

「ペテル！ ペテル・ドロフ！」と叫んで駆け出して來た。するとペテルと呼ばれた其の捕虜も列を離るれば死あるのみとは知りながら之を離れて妻の許に驅けて來た。獨兵は四人迄銃を擬してマリア・バルカの命を待つて居つた。

マリア・バルカの顔は烈火の様であつた。彼は少くも一露西亞人たりとも、彼が苦んだ程苦しめてやりたかつた。今こそ其の時が來た。併し其露人の妻は身をマリア・バルカの足下に投げ出して、『彼は私の夫です、どうぞ射たずにお許し下さい。彼は私の所有の凡てであります。』と歎願した。

台圖をせんとて擧げた手は震へた。そして遂に下りて仕舞つた。『進め』の號令が下つた。兵卒は驚いた。

マリア・バルカは其慄き恐怖れて居る女に向つて『彼を留め置け』と言ひ残して進軍した。而して復命の時、自分の行爲を委細辯明し且つ自分が女子なることも告白して、翌日はメメルに歸つた。斯くしてマリア・バルカの復讐は遂に空しくなつて仕舞つた。

アンネ・マリア・ライネルといふ獨逸婦人は東部プロシヤの醫師の妻であつた。自動車の運轉手となつて七ヶ月從軍し種々の興味ある經驗を『運轉手としての東部戦線に於ける七ヶ月』といふ書物に書いて居る。

彼は戦が烈しくなると、四週間も衣を脱がなかつた事もあつた。カイゼルが彼の聯隊を檢閲せられた時には男子と共に陛下の御前を通過した。一九一五年二月には寒氣に曝されて健康を害し、熱病になつたから夫が彼をベルリンへ連れ歸つた。其の書物によると、『兵士が互に我儘を棄て親切にする心情は誰も知る人はあるまいが實に立派なものである。戦は人心をして利を棄て高尚にせしむるに益があるものだ』と言ふて居る。

病夫が召集せられ、兵役に堪へざるを自ら戰場に従ひ夫を看護しつゝ、夫の義務をも盡さしめ夫と共に戦争に加つたが共に彈丸に當つて仆れた。夫は直に絶命したが妻は野戦病院に送られた。醫師は種々に手を盡して之を救はんとしたが彼自身は生くるを望まず、三日目に涙に曇る醫師の手を握りながら『イワン・リュウイツツエ！ 私も参ります』と低き聲にて夫の名を叫びつゝ絶命した健氣な女ヘレネ・リュウイツツエもある。

此の種の話を擧ぐれば盡きぬ程である。

(米國婦人マコレイ女史の實驗談)

(四) 小 結

既に論述したるが如く、女子高等教育の發達は社會各方面の要求であり、又文明必然の趨勢である。今後に於て社會の上級に立つべき婦人は、徒に階級や財産の機械的威力を借りて、其の體面を裝ふものでなくして、其の人格識見能力に於て、他を指導するに足る實質を具へるものでなくてはならぬ。此の如き女子の多數ある程其の社會の進歩は健全にして、且つ顯著迅速なのである。今後優秀なる歐米各國民の間に立つて、大和民族の榮光を恣にすることの出来る一大要件は、實に女子教育の進歩向上にあること、此れ決して疑ふべからざる斷案である。而して才能ある女子をして、どこまでも其の才能を發揮せしめるといふことは、社會の爲に最も必要なるのみならず、女子の人格的要求である。此の女子の才能と要求とを埋没枯死せしめずして、十分に發達せしめる爲には、各種の専門教育機關を設備する必要がある。是れ女子を有する國家社會の義務である。

男子は又自己を進め、自己の經營する社會を進めんが爲には、女子をして出来るだけ高き修養を爲さしめる道を開き、之が爲に援助を與ふる義務がある。如何なる男子と雖も、母たる女子を有せざるものなく、妻たる女子を有せざるものがない。女子の修養を高め、その進歩發展の機會を與ふることは、其の母たる女子に對する男子の義務である。賢良なる母を有せんと欲する男子は必ず女子の高等教育を援助しなくてはならぬ。同様に貞淑なる夫人を有せんと欲する男子は必ず女子の高等教育を奨励しなくてはならぬ。其の子女を完全に教育せんと欲する男子は必ず女子の高等教育に賛成しなくてはならぬ。何者か女子に對して俟つあるところの男子が、女子をしてなるべく高き修養を積む機會を得しめんとするに、固より何の不思議もある筈はない。

既に女子をしてなるべく高き修養を得しめることの必要なる以上は、其の種類程度をなるべく狭く低く限らんとす

るが如きは矛盾である。必ずしも男子と同一なるを要せぬが、併し女子に適當なる方式に於て、男子と同等なる教育の實質を與ふべきは當然である。更に言はゞ、女子として、男子教育と同價値のところまで進み得る道を開き與へるべきである。而して其の或る部分に於ては、男子教育と交錯し、共同し、全く同じ教育を受ける機會も亦勿論あるべきである。此の如くにして、女子の爲に必要な各種専門教育の機關を設け、更に大學教育を授ける道を制度上に開くことは、實に避くべからざる國家の要件と斷言せざるを得ぬ。

五 男女共學問題

既に論じたる如く、人間は男女兩性を以て成立せるものなるが故に、此の事實を無視して、人爲的乃至獨斷的に女性を男性化し、又は中性化するやうな教育を施すことは、自然の法則に背き、天賦の性能を矯め、女子を驅つて不具の人格者たらしむるの恐れがある。従つて男女共學の問題は慎重に考慮研究して、其方針を決定するを要する。然らば、比較的近代の教育を女子に試みた歐米諸國に於ては、如何なる成績を擧げ得たであらうか。今其の結果を調査して參考に供するは、決して無用の業ではない。

過去五十年間歐米諸國に於て試みられた女子教育の結果は、女子も男子と均しく人格教育の必要あるを明かにし、而して女子も亦教育の價値を有つべき能力有たることを認めらるゝに至つた。然るに、彼に於て、其の大學の門戸を開放し、或は特に女子大學を創立した重なる動機を尋ぬるに、固より女子の爲に計つた施設に外ならないのであるが、女子獨特の研究を進めるといふことよりも、寧ろ男子と同じ研究を女子に試みたといふに過ぎない。即ち男子の大學を模倣して、女子に適用したまでである。従つて、其の結果は、女子を男性化する傾向を誘致したのである。

然し女子には、女性に必要な特殊の學風生活を基礎として、其の教育を施さねばならないのは自明の眞理である。輓近米國のカレッジ教育に於ては、家庭生活の研究といふことに、甚深の注意が拂はれて來た。此の點に於ては、歐羅巴諸國よりも、女子の性能を重視して居る傾向が見えるが、尙其の大學教育に於ては、依然として男女共學を極端に實行して居るものが多い。米國女子教育の缺陷は、蓋し此處に胚胎して居るのである。

思ふに宇宙の萬有を通じて、其の本質は兩極になつて居る。其の一極は即ち男性にして、他の一極は即ち女性である。宇宙の理想は、一言を以て之を約すれば、此の兩性の調和である。従つて宇宙の進化は、結局此の兩性が、各其の理想に向つて進展する活動と、其の反動との關係をいふのである。されば此の兩性の理想的分化は、其關係の調和不調和によりて、個人社會人類の平和と不和、幸福と不幸、光明と暗黒の分岐點となるのである。故に其の理想的調和を來たさんとするには、此の兩性を基本とせる男女關係、家族關係、友情關係、團體關係、國家關係、社會關係等、凡ての關係を如何に成立せしむれば、よく其の圓滿善美を期し得べきかといふことを考究せねばならぬ。而して此の關係の根本精神と其の精神の實現を目的として進むべき責任を自覺せしめ、以て女性の使命、婦人の天分を全うする道を示導するのが、やがて女子教育の方針であり、同時に其の目的であらねばならぬ。換言せば、婦人が女性としての特性を發揮し、其の人格の擴大してゆくといふことが、婦人自らの天職を全うし、同時に完全なる人性を造るといふことに外ならないのである。

然るに、歐米の男女共學制に於ては、此の兩性の分化と調和とが十分に發達せざりし爲め、種々の缺陷弊害を生じて居る。吾人は其の缺陷弊害の由來すところを探究して、之れが改善利導の策を講ぜざるべからざるを痛切に感ずるものであるが、之れを以て男女共學を絕對に排斥せんとするものではない。只極端なる共學論者、即ち女子の個性、年齢、國情、社會狀態等を顧みずして、無制限に人爲的獨斷的に、共學を主張する人々の偏見に反對するのである。

場合によりては、其の人の性質により、事情により、時代によりて、一定の條件の下に共學せしむることは、敢て不可なきのみならず、或る専門教育に於ては、寧ろ共學を利とする場合もあるが、女子の十二歳より、廿三歳までは、女子の健康の爲め、男女兩性の學習研究の便宜の爲め、時と力の經濟の爲め、注意力の集中の爲め、殊に性の教育訓練の爲めに、共學は不便にして、利益よりも却つて弊害の多い事實を否むことを得ないのである。故に吾人は各方面の利弊を考究したる結果を綜合して、今後我國の女子高等教育は、一方に於ては、特立の女子大學制度を設けて、徹底せる女性教育の道を開き、他方に於ては、一定の制限の下に男子大學の門戸を開放して、女子の爲めに研究の便利を與ふることを以て、最も有効適切なる方策と信ずるのである。

吾人は又女子教育の向上進歩の道を講ずるに當り、女子は國家の繼續者として、又種族進化の貢獻者として、重大なる任務を有すること、此の任務は、母として、家庭に於て遂行すべく、然かも同時に、此の任務の遂行が女子自身の最上の進歩、最高の幸福であることを信ずるが故に、女子には、女性として特殊適切なる教育の必要なることを看過することを得ぬのである。かゝる重任を負荷せる女子に對し、之れに相應せる適切なる教育準備を與へずして、唯其の効果の十全のみを促がんとするは、訓練なく素養なき看護婦の一隊を戰場に派遣して、能く赤十字の任務を盡さしめんとするに等しく、誰か其の無謀なる愚學たるを嗤はざる。スタンリーホール博士は、二十有餘年間女性研究の結果として、

吾人は青年女子の心の内容を知れば知る程、彼等は意識的に又無意識的に、人性の要訣を母たる一事に於て求むることを發見す。

と云うて居る。然るに多くの女子は、社會上偏頗なる取扱を受け、病苦に悩まされつゝ、國家の子女を産み出し居るに拘はらず、社會國家は毫も同情なく察知なく、之れが救済の必要を慮からず、母として相當の教育を與ふること

を怠り、甚しきは子女保育の法さへも教へざることの多きが爲めに、嬰兒の死亡率は年々歳々増加しつゝある状態である。假令又高等教育を授くるも、肝要なる女性の涵養を顧みざる時は、女子を男性化して、結婚数を減じ、出産率を低下せしむるの恐れがある。彼の歐米の教育ある女子が、家庭生活に適せざるとか、出産率が減ずるとかの非難を受くるは、全く其の偏跛なる高等教育や共學制度やに由來するところの弊害の結果である。是れ我國今後の女子高等教育の方針を策するに當り、殊に注意と考慮とを要するところである。

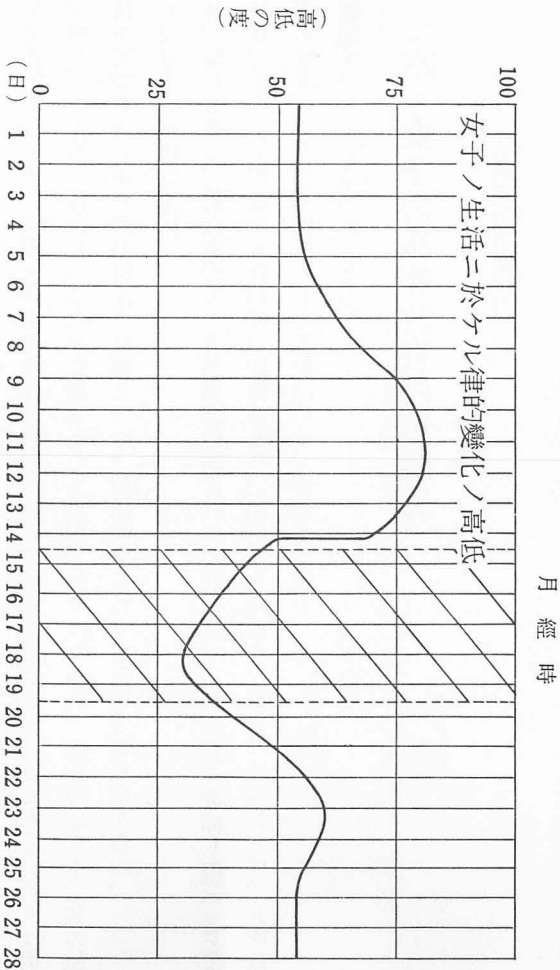
共學問題を考ふるに當り、今一つ主要の點がある。それは女子の健康増進、活力永續といふことである。女子の身體は男子に比して變化多く、且つ音律的に發達するものであるが故に、毎月潮來する月經時、又は十年位毎に循環し來る厄年等に於ける身體の状態は、最も細心なる注意を要するのである。若し男子と競争する爲に、其の音律に順調せざる生活を營み、過度の勤勞を爲し、又は四圍の事情の刺戟によりて、懊惱勞苦するが如きことあらば、女子の生活を障害すること決して少なからざるべく、殊に所謂試験學問の弊は、女子に取りては一層其の健康を害する原因となる。今生物學生理學の示すところの、自然生活の週期に現はるゝ音律的振動の波狀を左に掲げて參考に供する。

左圖ハ毎月一度ヅ、高マル女子ノ心理的及生理的現象ヲ示セルモノニシテ、例セバ脉搏、體溫、血壓ノ如キ、月經ノ近ヅクニ從ヒヒ次第二高マリ、月經ノ終ニ於テ尤モ低ク、漸次平常ニ復ス。從テ月經中ハ、心的精力筋肉力減ゼラル。其他印象ヲ與ヘラレ易ク、暗示ニ感ジ易ク、自制力減少ス。ヒステリーノ發作多キハ此時ニアリ。サレバ月經ハ孤立セル一ノ現象ニアラズシテ、女子ノ心身ニ互レル連續的現象ナリ。心身ノ作用ハ此時ノ如何ニヨリテ、或ハ男子ニ勝リ、或ハ男子ニ劣ルモノトス。

吾人は女子の生理状態より見ても、又其の變化より來る心理状態より見ても、其の教育に於ては、女子としての特殊の修養訓練の忽がせにすべからざるを力説するものである。其の成績の考查に關しても、なるべく從來の記憶試験を全廢して、思考力を査定する新法を案出し、人格全體の進歩發展より打算するを本位とせる、適當の方法を立つる

の緊切を思ふのである。
 スタンリーホール博士は又曰く、

自然は文明の進歩と共に男女をして相接近せしめずして、却て其の分化を促すものである。故に吾人は男女によりて教育の方法を異にせざるべからずと思ふ。女子は宜しく女子の本性に適合する教育を求めねばならぬ。女子にして男性と同一なる教育を受け、男性的たらんと望む間は、女子は畢竟劣等にして、似て非なる男子の模倣者たるに



過ぎないのである。而して男女兩性の間に差異を生ずる春機發動期に於て、殊に著しく兩性の懸隔を見るが故に、心身共に成熟するに至るまで、少なくとも數ヶ年間は、多少相離れて、獨立したる生活を送りて、以て其危機を終らねばならぬ。之れを實際に徴して見ても、十二歳より十四歳の頃に至れば、家庭内に於ても、兄弟と姉妹とは各相互に獨立せる生活を營むやうになり、其の遊戲趣味を異にすると共に、家庭内の業務に於ても、其の爲すところを異にするといふ有様である。此の状態は、生物學上より觀察するも正當である。故に吾人が學校其他の制度に於て、男子は益男性的ならしめ、女子は益女性的ならしむることに留意することが肝要である。吾人は男女兩性の差異を十分に理解し、母たる事は父たる事と全然別事たることを忘れてはならぬ。兩性の孰れも、其の他の一方を模倣することは不可である。兩者其の特性を發揮しつつ、相調和することを目的とせねばならぬ。

博士は又大學に於ける共學に就て曰く、

一方に於ては、疑ひもなく、男女兩性の一方が異性の前に於て、最も能く其の美質を發揮し得べきことあらんも、又他方に於ては、此の目的を達する爲めに、如何ばかり、如何なる時機に、及び、如何にして、共學教育を施すべきや。此等の疑問は、今日尙依然として未解決のまゝ存在して居る。

と。實に此は輕視すべからざる問題である。

六 女子の高等教育の能力

(一) 精神的な能力

吾人は性の兩極を説き、男女の生理心理に於ける稟賦の傾向、特性、遺傳等の差異を論じて各其の特殊の教育方針

を定むるの必要を主張したが、男女の能力の總和に於て優劣あるとか、又は其の價値に上下あるとか、其の差異が絶對であるとか、男女の人格に於て高低があるとかいふ如き意味を主張したのでは決してない、のみならず、却て女子は男子同様、智情意に於て永久進歩發展の可能力を潜有し、又其の權利を所有するものであることを信するのである。是れ獨り吾人の私見のみではない、吾人と同主義の學者スタンリーホール、ヒューズ女史、クレー女史等、皆同一の意見を發表して居る。スタンリーホール博士は次の如く云ふ。

女子に關する現代智識は、女子は各機關各組織に於て、男子と異なりたる特性を有するものとして之を描出して居る。即ち女子は、其の心身の中に、人類が曾て獲得したる諸有經驗後天的善を蓄藏し、其の一をも失はざらんが爲め、保存の働き手となり、破壊、消費よりも、寧ろ建設、蓄積に向ひ、一段高き階段に於て、之れを消化し同化せんと欲するもので、其の容積に於ても、性質に於ても、光榮の頂上に達して居る小兒青年を模範的に代表して居るもので、實に人類進化の曲線に於ける絶頂に立ち、尙一步進んだ將來の優秀人類の開展し來るを待つて居るものである。之れに比して、男子は系統的發生に於て、未だ老衰したるには非ざるも既に老境に入らんとする傾きがある。

現代智識が此の如き結論に達したるは、近代に於ける女子教育の進歩と、女性研究の廣らし來れる結果に外ならず。然るに今日尙女子の可能力を疑ひ、男子よりも劣等なる人格と見做して、其の教育の上進に反對する論者なきに非るも、其の論據とするところを尋ねれば、多くは女子の性情、心身の特質等を科學的に研究せる事實論ではなく、古來の聖賢碩學の獨斷的概念や、抽象的教訓が先入主となりて、積年の惰性感情により、女子の可能力を否定するに過ぎないのである。由來女子は理性に缺け、智力に乏しく、事相を觀察するに當り、本能や直覺によりて、無意味に原因結果を聯結するものなりとなし、餘りに智力に於ける男女を甄別するの謬見がある。甚しきは、中世紀に於て有

名なる監督や學者の中には、女子は靈魂を有せずとか、人格無しとか主張するものすらあつた。ポーブの如きも其の一人で、ニーチエ、シヨウペンハウエルの如きも女性を蔑視して居る。ナポレオンに至つては、女子を單に快樂の機關視して居つた。東洋に於ても、此に類する思想は、儒教佛教をはじめ、至る處に見ることが出来る。而して此の偏見謬想は現代に於ても猶其の迹を絶たないで、女子の能力を絶對に男子と區別し、或は女子の可能力を藐視するもの少なからざるを見るのである。例へば女子は直覺的で、男子は論理的であるといひ、女子は神祕的で、男子は科學的であるといふが如き、理智に屬する女子の能力を男子よりも劣等のものと見做して居る。然し男子の論理は全く直覺を缺いて居るのではなく、女子の直覺も亦全く論理を離れて居るのではない。神祕的であり、科學的であるといふも、畢竟其の度合の差にして、單に兩者の思考力の表現特長が異つて居るに過ぎないのである。蓋し男女とも、人格者として具備すべき各要素は、互に相關相助の複雑なる過程を経て發達すべきものなれば、若し其の一を缺いて居つたならば、他の要素の發展を全からしむることは至難であつて、延いて全體の完整と健全を望むことは不可能である。男子の論理は二二が四にして、女子の論理は二二の三といふが如きは有り得べきことではない。又男子の神祕と女子の神祕と、別種の實體のあるわけではない、眞善美とか、生命の無限とか、人格の發展とか、凡て根本の本質は、人類に普遍のものであつて、男女によりて區別のあるべきものではない。男女の性により、後天的境遇によりて、其の發展の方面を異にし、男女の特性として現はれるのである。而かもそれは永久に進化するもので、固定的のものではない。

故に女子の能力の孰れの方面、孰れの要素にも適當の境遇を與へ、其の賦性の成長、發展の自由を許すならば、其の長所は益伸展し、其の短所は補充せられて、漸々進歩し行くことは疑ひもないことである。然かし今日は未だ過渡の時代に屬し、女子が長く奴隸的境遇に局限せられ、束縛せられて來た、其の習慣と遺風より、全然脱却して居らぬ

爲め、過去半世紀間に、女子の位地と價值とは著しく向上認識せられて來たとはいへ、未だ女子自身の自覺も徹底して居らぬところが多い。女子が發展して、各方面に其性能を發揮し、以て人類の進歩に貢獻するのは、寧ろ今日以後の事に屬するのである。女子の能力に就て、過去を推して將來を規するは、早計の觀察臆斷である。

女子の高等教育可能の實例

此處に考察を要することは事實上の力の問題である。歐米に於て男子が女子より優つた能力を有して居るといふ説を固く信じて居つたのは獨逸である。ところが其の獨逸すら今日に於ては智力に於ては男女の區別なしといふ説に變つて來て居るのである。されば亞米利加、佛蘭西、伊太利、白耳義などの國々では、段々其の偏見がとれて來て、最近五十年間婦人の能力を著しく認めて來て居ると同時に、婦人自身も實際に著しい進歩を示して居るのである。

然るに悲しい事には我が國ではまだ多くの婦人に對する偏見が依然として勢力を持つて居て婦人の實力の認めらるべきものがないといふ有様である。尤もこれは偏見の多い従前の日本の社會に育つた婦人には無理のないことである。たゞ今後彼の歐米婦人が先づ事實を以て證明して居るが如くに、日本婦人も亦事實の證明を擧げて此の従前の偏見を破つて行くといふ強い確信を持つて貰ひたい。さうして現代の婦人が自ら試み自ら實驗し自ら努力して行く内には、やがて歐米の婦人と同じく押しも押されぬ事實を産み出すべき時が來るであらうといふことは疑ひのない事である。

十九世紀の初になつて彼のジョン・スチュアート・ミルは言つて居る。「男女は同じものである。けれども唯一つその人種の異なる如くに異なつて居る。此の外は今後若しも女子に男子と同じ教育を與へたならば全く同じものになる」といふことを言つて居る。これが今日の歐米に於ける實際である。

尙此の外に一層強い消極的潜在意識が今日の婦人の頭に殘つて居てその決心を鈍らせて居るものがある。それは即ち古聖賢の教

訓及びその婦人に對して宣言した格言である。例へば東洋に於ては釋迦や孔子の如き偉大な聖人の訓言を本として、その信仰者が婦人に對する教訓を組立て、それを強い信仰として居るのである。

もとよりそれは價値のある言葉には違ひはない。けれども後世はその言葉に囚はれて偉人の教へた言外の眞意を汲み取ることが出来ない。況や聖賢の言葉と雖も時代を経て、事情を異にしては言ひ表はすべき言葉も異なるものがあつたであらう。けれども言葉に囚はれたる後世人は婦人をもその言葉の範圍内に限つてしまつた。さうして孔子の所謂「女子と小人は養ひ難し」又釋迦の訓の「女は罪障深し」又カント及びショーペンハウエルなどの思想から來た「婦人は子供と大人の中間物」とかいふやうに、何れも凡ての婦人を未成品として取扱ひ之を一括して侮辱の宣言を下して來た。試にカントの婦人に對する説を抜萃して見ると、

凡て抽象的科學(論理學哲學の如きもの)凡て無味乾燥なる知識は如何に人生に有用であつても腦力の堅實なる男子の手に委ねなければならぬ。此の故に女子が幾何學を研究するといふことはないであらう。

と又

抽象的科學は子供や女には不可能である。子供と女とは抽象的學問には適しない。故に婦人の頭は普遍的眞理に到達することは出来ない。未だ嘗て女にして哲學や論理の如き問題を七分半の間考へ得るものに出會つた事がない。

女は我々男子に缺けて居る處の性質を持つて居る。それは特殊的の知識と、そして言ふ可からざるところの魅力である。併しながら論理又推理又思想を構成する、又知識の原理を結びつける所の思想と思想の間、原理と原理の間の關係を捕へる如きことは不可能である。たとひ最も天才であつて、又最も高き能力を與へられて居る婦人であつても平凡なる男子の達する高さに行き得るものは稀である。

と言つて居る。即ち哲學、論理學、又は修辭學等の如き凡ての研究發見の力の本は頭腦の働きにあるので、これが婦人には出来ないといふことを宣言して居るのである。

此のカントは獨逸國に於てはその政權者として哲學者として最も崇拜された人であるが故に、その所説がより多く重んぜられたのである。それがために獨逸が女子の高等教育を認めた事も他の列強國の何れよりも遅かつた事は誰も知る所である。カントやシヨーパーンハウエルの消極的婦人觀が凡てに積極的な獨逸に於て斯くの如く信ぜられた事を見ても、それが一面の眞理として見らるゝものであることは疑がない。

然るに一方には文明の光の照り輝いたギリキ、ローマや、又は近代文明のアングロサクソンの如き、その勃興の原因を見ると、必ずその根柢には婦人の頭腦、婦人の能力に華の咲いた時であることが證據立てられて居る。又婦人の力の凋落した時には文明の華も亦凋落して居るといふ事實もある。此の事實を信じ、彼の偏見的思想に捕はれなかつたギリキやアングロサクソンの國々では早くより婦人自身が自由に進歩して居るのである。これがその國々の婦人が他の國の婦人に先んじて覺醒し、婦人自ら其の境遇を拓いて、その社會をして早く女子の價値を認めしむるやうになつた重大な原因であらう。左にそれ等の國々に於て古來婦人にしつて男子と等しくその能力を發揮して學界に認められた模範的婦人の一二を擧げて見ようと思ふ。

文明に現れたる婦人

(一) ハイペーシア

文明に現れたる婦人の例として茲には先づギリキスのハイペーシアを擧げる。

ハイペーシアは紀元四世紀の末から五世紀の初に亘つて其の生涯を研究に捧げた一婦人である。ハイペーシアはアレキサンドリアに教授として又著述家として又發明家として名聲高く、當時の有髻男子をして辟易せしめたのである。のみならず十二世紀の初に彼のニュートンが新發見の發表をするまで彼の女の右に出る發明家はなかつたのである。

ハイペーシアは初め數學を其の父に學んだ。その後は別に大學にも行かずして彼は遂に數學、哲學にその天才を發揮したのであ

る。けれども彼はその天才を以て所謂學者ぶるといふやうなことや、又は高慢になつて婦人としての人格を傷つけるといふやうなことはなかつた。即ち婦人としての禮儀作法は一つとして彼に實行の出來ぬものはなく、優美にして謙讓なるその淑徳は益々その人格に光輝を添へた。けれども學問上のことに就ては常に進取主義であつて、其の態度は實に宗教者が神に對するが如く、信ずるものゝ外にはたとひ如何なるものゝ前にも一步も譲らなかつたのである。それがために不幸にして時の大僧正と競争するの止むなき場合となり、彼は遂に僧正の黨人に虐殺され、非業の最期を遂ぐるに至つたのである。此の時彼の多くの著書も悉く焼き棄てられたのであるが、それがために彼の學識徳性は光を失ふことはなく、當時の識者は皆彼の學徳に敬服して大にその横死を歎じてゐたのである。當時 그리스のある詩人は次の如く彼を稱へた。

「偉大なるハイペーシアよ、御身は知慧の表徴であり能辯の理想である。予は御身の言葉を聞く毎に又御身を見る毎にげに崇拜の念を禁ずることが出來ない。」

と。又監督のシエーシアといふ人は嘗てハイペーシアに就て學んだ人である。此の人も

「ハイペーシアに接してその聲を聞き、その人格に觸れる時に起る感じは即ち哲學の神聖なる神祕の眞理を握つて居る人といふの外はない。」

と語つて居る。又或人は

「ハイペーシアに接すれば我が恩人我が先生我が姉我が母といふ情を禁ずることが出來ない。」

と敬慕して居る。ハイペーシアは實に斯くの如き輿望をその一身に集め、古代文明の華と咲いた人であつた。

今一人矢張り古い時代の人で例を求めて見ると、 그리스にアスペシアスといふ婦人哲學者があつて、此の人には彼のソクラスでさへ、非常に尊敬の念を以て接したといふことが當時の歴史に残つて居る。斯くの如き歴史を有つた歐米の婦人界に於ては近世に至つては益々有爲の婦人を輩出し、婦人の科學研究家さへ出て種々の發見を爲し、社會の改善に資したものが尠くない。彼のマ

ダム、キユーリー(ラヂウム元素の發見者で一九〇三年にノーベル賞金を受け、現に佛蘭西大學の教授である)ミセス、フォーセツト(英國の大學教授)マダム、セルマ、ラーゲレフ(瑞西の著述家、一九〇九年ノーベル賞金を受く)パロネス、バースフオン、サトナ(ルーマニアの人で此れもノーベル賞金を受く)等がある。是等の人々は比較的専門科學の方であるが、近頃誰も知る女流教育家としてはドクトル、モンテツソリーがある。

女史は現存の人でもあり且つその研究が一般の人々の興味を引く處のものであるから、左に少しくその研究的態度を紹介して見ようと思ふ。

(二) ドクトル、モンテツソリー

女史は伊太利の國に生れた。その研究力は世界の學界之を認めて居る。近頃亞米利加へ行つてその教育主義を宣傳して居るが、ハーバート大學教授のホルンス氏は女史を紹介して次の如くに言つて居る。

「モンテツソリーの説は顯著にして刷新、且つ重要なものである。その組織的方面に於ては髓に獨創的なものがある」と稱へて居る。此のモンテツソリーが研究し發明した原理に著しき價值があるといふのは、女性の特徴が加はつて居るからである。即ち婦人獨特の同情、直觀の力が、その社會的觀察に加はつて居ることである。而も科學的訓練をなし、集中した研究をして居るから、その蒐めた研究材料は凡て女史の獨創的發見であつて、恰もベスタロツチ、フレイベルの熱心、及びその働きに比較すべきものがある。否その教育界に貢獻したる婦人の創始的能力といふ點に於てはベスタロツチやフレイベル以上であるといふことが出来るのである。女史は研究的態度といふことを語つて次の如く言つて居る。

「一體どういふ人を科學者といふことが出来るか。物理學の研究室に入つてその器械を上手に使つて居る人であらうか。又化學の研究室に入つて試験管を使つて上手に實驗をして居る人であらうか。又博物の研究室に行つて多くの標本を集めて顯微鏡を見て居る人であらうか。決してさうではない。

私共はどういふ人々に科學者の名を與へるのであるか。つまり此の實驗をするのは一つの手段であり、一つの導きである。かの生命の深い眞理に生きるために、及び私共を恍惚たらしむる程の祕密を知るために其の祕密の前に掛つて居る幕を開くために——即ち眞理に行く道を開くために研究しつゝある人が眞の科學者である。

道のために盡すといふ事は自然界にある所の神祕的祕密を自分の心の内に愛する熱情である。自分といふ考が遂に失くなくなつてしまふまでに眞理を愛し慕ふ心、それだけの熱心興味を以て自然を研究する人が眞の科學者である。

科學者といふは決して巧なる器械の取り扱ひ者ではない。彼は自然を崇拜して居る人である。恰も或宗教信者が自分の神を拜む時に、己を忘れて禮拜して居る時のやうに、自然を崇拜し研究する者即ちその表徴を通じて神を信ずる宗教者の如き生活を爲す者が眞の科學者である。又彼の簡易生活を送つてその全力を仕ふるものゝために費し、よく沈黙を守り、ただ祈りに耽るトラピストの如き態度を以てその研究に集中する人こそ眞の科學者である。」

以上は女子も高等教育に可能である例證として、歐羅巴に於ける研究に成功せる婦人の代表者數名を擧げたのに過ぎないが、かゝる確かなる事實は女子も高等教育を受けるに足る賦性を潜有してをることを證明するに足ると思ふ。

(二) 身體的の能力

女子に高等教育を受けしむれば、女子の健康を害し、其の體格を劣弱ならしめ、其の出産率を減じ、延いて民族に悪影響を及ぼすとの理由によつて、女子高等教育に反對する議論を主張した學者や教育家があつた。而かも之れは五十年前の昔であつて、現今の醫學者、生物學者、心理學者、人種改良論者、社會學者等の穩健なる結論は、今日歐米に於て見るところの人口の減少、結婚率の減少、離婚者の増加、出産率の低下等は、其の原因が複雑で、種々の事情の錯綜より來た結果である。其の重なる原因は、經濟上の壓迫、男女共學の弊害（即ち女性を無視した男子大學に模

做せる女子高等教育の弊害)、及び利己主義の思想等に存するとして居る。然しながら一方には、半世紀前に於て、女子を早熟に教育して早婚せしめたことが、人口の増加、人種の改良に有効であると思惟した説も、亦既に時代後れとなつて、現代に通せざる固陋陳腐の見たるを免れないやうになつた。今日では、女子の脊柱、筋肉、其他諸機關の生長と、心理状態の發達とが成熟完整して、健全なる子女を産むに適する母たるには、如何しても廿三四才までの歳月を要するが故に、其の年齢に達するまでに、適切必要な教育を與ふべしとの意見を有つ學者が多くなつた。是れによりて之れを見れば、吾人が主張する如き、女子の賦性に適切な教育を徹底することは、實際に於て、婦人の健康を増進し、其の生活力を永續せしめ、形質共に優秀なる子女を産み、之れを健康に育て、人口の増率を高めるといふ結果を將來するに至るといふのは、決して獨斷ではない。而して廿二三才まで最高の教育を受くる女子は、心身共に最優秀の者のみで、比較的少數の女子に限られて居る。故に假令女子高等教育と其の健康との問題に、尙多少研究の餘地があるとして見ても、此の少數の希望者に高等教育を受けしめ、實驗的に之れを試むるも、人口の減少問題等に影響があるわけではない。私は過去十八年間、我が日本女子大學校に於て、能ふ限りに女子の教育を高めて見た。其の經驗と成績によれば、未だ完全とはいふ能はざるも、過渡時代の今日に於ては、十分の満足を感じて居るものである。殊に其の健康状態、子女の出産率、子女の養育、及び自己の訓練修養等の実績は、決して不良にあらざること

を信ずるのである。之れを同じ境遇に生活せる、初等教育、若くは中等教育を受けたる者に比較する時は、凡ての點に於て、遙かに優越して居ることは明確なる事實である。

次に掲ぐる二三の統計は、我が女子大學校卒業者に問題を發したるに對し、各自より過る二ヶ月間に回答したる分丈の、諸種の材料を分類せるものにして、此の問題に對し多少の參考となるべきを信ずるのである。

(第一號表)

日本女子大學校出身者現狀逐年表

家庭補助及び傍ら に從事するもの 研究中のもの	職業及び専門研究 に従事するもの	既婚 數	現在 數	卒業 數	卒業後ノ年數	凡例		卒業回数
						既婚	職業及び専門研究 ………家庭補助 (横線上の數字は 百分率を示す)	
五	四〇	三	九四	九四	三ヶ月	,42	,03	十五回
二五	三六	一六	七九	七九	一ヶ月	,25	,16	十四回
三	三	七	九〇	九〇	三ヶ月	,26	,37強	十三回
二七	二	三	七九	八二	三ヶ月	,23	,31強	十二回
一七	三	四	八四	八六	四ヶ月	,24	,52強	十一回
三	一五	七	六三	六四	五ヶ月	,23	,53	十回
九	二	五	八四	八七	六ヶ月	,13	,74強	九回
一四	一〇	九	一二三	一二〇	七ヶ月	,08	,76強	八回
二六	一四	二	一四七	一五七	八ヶ月	,08	,70	七回
三	一九	三	一六七	一七六	九ヶ月	,10	,74強	六回
三	八	一	一四八	一六〇	十ヶ月	,05	,83	五回
一	九	一	一四〇	一五三	十一ヶ月	,05	,90	四回
一	五	二	一三〇	一三二	十二ヶ月	,02強	,91	三回
一	二	二	一二七	一三三	十三ヶ月	,08強	,89	二回
一	三	一	一〇六	一二九	十四年	,10	,88	一回
二	二	一	一四七	一四〇	十四年 二於テ	,01	,96	會友
二四八	二五八	一三五	一七五	計合 一八八	計合			

(第二號表)

日本女子大學校出身者現狀類別表

大正七年六月末日現在

一七六五名に就て調査

種類	人数	種類細別
主婦	一三三五	<p>此の數中、家政を執る傍ら上段各項に示す業務並びに研究に従事する者及び病夫亡夫に代つて一家及び事業を経営するもの合計百〇五名あり。其他普通家庭の主婦一二三〇名中、家庭の事情個人の才能に由り家事以外に働らくもの尠からず。主なる仕事左の如し。</p> <p>副業(養鶏、養蜂、養蠶、蔬菜栽培、生命保險代理店事務、新聞雜誌寄稿、ミシン裁縫、商業等)</p> <p>公共事業(地方開發、農村教育、婦人會、風俗改良、語學獎勵、殖民地に於ける國語教授、櫻楓會本部及び支部の事業等)</p> <p>夫の事業助力(夫の秘書役、研究助手、事業協力者として働らく。その種類は薬局上の調査研究、青年修養塾、夫の部下なる一小社會教化等)</p>
教育	二四〇	<p>日本女子大學教授及び助手、女學校長、寮舎教育、中等教育、初等教育、保姆、幼稚園長、家庭教師、語學教授、家塾等。土地の狀況により中學校教師を兼ね、若くは青年教育に與るものあり。教鞭を執ると共に一村一郷の教化指導に盡力するものあり。</p>
社會事業	三二	<p>慈善救濟、托兒所、雜誌發行、新聞雜誌記者、傳道、女工監督、農村教育、婦人會、櫻楓會事業は上記各種に從事するもの、外、日用品廉賣、講習會及び目下準備中の購買組合等あり。</p>
實業及び事務	二六	<p>商店經營、旅館經營、機業工場經營、三等郵便局事務、會社員、圖書館員、タイプスト、廣告取次、家庭管理等。</p>
研究中	六一	<p>海外に於て家政學文學の研究、大學院に於て食品化學研究、その他文學、繪畫、彫塑、音樂等。</p>
宮中奉仕	三	<p>皇后宮職御用掛、皇子御殿出仕。</p>
家庭補助	二四八	<p>目下開業準備中の醫師、米國赤十字救護班に加はりて浦鹽に派遣中の看護婦、父母、兄姉の家庭を補助する傍ら志す方面に向つて研究或は準備中のもの。</p>
海外在留	一〇八	<p>主婦、教師、及び勉學の爲め留學中のもの。 在留地は米、英、佛、露、墨、支各本國及び加奈陀、キユバ、布哇、シンガポール、印度、安南等。</p>

(第三號表)

日本女子大學校 卒業後の進歩及び境遇
出身者

進歩の状態及び目下の境遇	第一回報告數七四五に對する百分率
人格の向上發展及び境遇開拓に努力しつゝ、あるもの	九割四分
天賦性の向上發展に努めつゝ、あるもの	七四
順境にあるもの	九二
逆境に在るもの	〇八

[備考]

明治三十七年三月第一回卒業生を出してより回を重ねること十五、大正七年六月を以て正に十四年三ヶ月に及べり。第一回卒業生は、在學中より熱烈なる精神結合を以て櫻楓會を組織し、永久に卒業生一致協力の機關としたり。爾後其の數を加ふること十五回、相依り相助けて、最高理想の實現に向つて、健闘努力の道程を經來れり。乃ち、此の團體的精神と、卒業生各個人が實社會に於ける生活との間に存する緊密なる關係は、絶えず相互に刺戟を交へ、不斷に進歩を促すこと大なり。

今次各個人が卒業以來の經驗を集めて十五年間の経過を概観するに第一回より第四―五回に至る期間に於ては女子高等教育に對する世人の理解未だ充分ならず、卒業生の一舉一動批評の的となり、且つ一種の反感を以て迎へらるゝ有様なりき。由つて各自其の行動の波及する所尠少なからざるを思ひ、努めて突進を慎しみ、注目を避け、忍從の間靜かに實力の練磨を計ること數年、漸く周囲の信認加はり、曩日反對を唱へたる人々の手より母校に入學生を送らるゝ機運に到達せり。而して一面に時代の趨勢は高等教育出身者をしてかゝる難關に永く留るを許さず、年と共に進路は開展し來れり。斯る経路は出身者各個人の既往にも亦櫻楓會十五年

の歴史にも等しく看取せらるゝ所なり。曾て目前の荊棘を切るに忙しかりし力を轉じて、各自の人格才能を充分に伸ばし、何等かの寄與を社會に向つて試み得る今日の境遇に至れるを感謝するは、出身者の多くに共通せる感情なり。

出身者は當初より斯くの如き境遇に處して謙遜にして質實なる生活のうちに價値を見出し、そこに獻身奉仕して自他の満足を計り、幸福を冀ふ精神の全體に亘り一貫せるあり。従つて櫻楓會に於ける團體的活動の外、個人の事績は外面に現はるるもの數に於て多からずと雖も、内容ある堅實なる家庭の建設を始め、社會的、教育的に盡卒せる効果は或は都會の中心に或は僻村の奥に、微かながら光を現はしつゝあり。

(第四表) 日本女子大學校 出身者 子女の健康及び學業成績

健康狀態	子女數		百分率	等級	學齡兒數		百分率
	強	中			優等	良好	
強	七三	七三	八割五分	優等	一六	六割二分	
中	七	七	一割一分	良好	六	二割八分	
弱	二五	二五	〇割二分	中	三	〇割九分	

〔備考〕

出身者主婦として最も其の力を注ぐ所は子女の教養なり。

七 我が帝國は今後如何なる女子大學を要するや

吾人は女子の天性稟賦の傾向と特性とを研究して、女子は本能的に人類の獲得せる諸有後天的善を保存し、一段の高所に於て新要素を同化して、社會國家を向上せしめんとする資質を有せること論斷した。此の見地から、我が帝國の女子は、其の本分責務として我が國家族制度の眞髓、國民性の美質、及び博愛仁慈の婦人の本領を永く保存して、之を醇美ならしめ、男子の及ばざる所を補ひて、西洋文明の長所を同化し、東洋文明の復興を促がす使命を荷へるものであると信ずるのである。故に吾人は、我が國の女子教育の方針を決定せんとするに當り、男子のそれを模倣し、或は歐米のそれを移入するの不可を唱へ、女子に最も適切なる特殊の高等教育を主張せんとするのである。而して吾人は女子大學の中心學科として、國情に鑑み、時代に考へ、先づ家政學科、宗教科、醫學科を置きて、漸次其他に及ぼすのが適當であらうと思ふのである。

第一 家政學科(理科)

直覺的神祕的賦性を健全に發展せしめ、科學的頭腦を啓發し、熱情的勢力を善導し、家庭問題、婦人問題、社會問題の合理的研究、家族制度の眞髓の保存醇化、國家功率荒廢の巨救、家庭消費經濟の有効、家庭副業の組織的組合、兒童母親の保護、國民休養の指導によりて一般健康の増進等、社會の改善進歩に貢獻し得るところの智識技能を養成せんことを期し、之れが爲めに、家政學を中心として、理科、經濟學科、農科、商科、人類學科等を聯絡の分科として開設する。

第二 宗教科(文科)

國民性の美質、即ち國民精神生活の後天的美を保存醇化し、精神的荒野を開拓し、物質文明の弊竇を矯救し、國民の信念を覺醒し、兒童の信念を涵養し、社會救濟事業を指導し、婦人團體の組織を指導するに足るべき、母親教育家指導者を養成せん爲め、宗教科を設け、之れに關聯して、文科、社會學科、教育科、美術科、音樂科の如きものを置く。此の宗教科は、我が國の國情と、女子の賦性とに適當せる精神的活動の源泉となるべきものにして、男子大學の文科哲學科等に對比すべく、勿論學理の蘊奧を講究するも、其の特色としては、生活と發表とを重んじ、情緒情操の涵養に基礎を置きたいのである。宗教哲學の如きも、男子は之れを思想として取扱ふも、女子は之れを生命として自ら生活し、家庭社會に發表する。即ち彼は智識として研究し、此は情緒情操として經驗する方面に進展する傾向を有するのである。文學美術音樂に於ても、男子は之れを生活の爲めの職業とし、或は享樂の媒とし、動もすれば趣味と品性を墮落せしむる危險に陥り易きも、女子は之れを天職とし、其の情緒情操を美化し、宗教的生活を發揮するを本旨とする。約言すれば、男子は學藝を商賣化し、己れの享樂に利用せんとする弱點を有するに反し、女子は斯道の爲めに犠牲奉仕の根本要求を充たして満足する長所を有して居る。

第二 醫科

吾人が特に女子に高等醫學を授けんとするは、慈愛と犠牲との念に富める其の稟性を發展せしめて、男子醫師の短所を補ひ、家庭社會國家の健康狀態を改善上進せしめんとするに在る。古來我國醫術の動機は仁術にして、正義人道の主義に合致し、眞に神聖なる天職の觀があつた。然るに物質的思想の餘毒は、此の仁術をも汚瀆して、殆んど之れ

を商賣化し、其の弊弊整に堪へざるものがある。従つて其の研究も物質形體を重んじて、人間心理の眞髓を疎んじ、往々其の診断を誤り、己れの名利より打算して、病人を見殺しにするも敢て厭はざるものある風を生じ、其の間、同情仁愛の精神の發露を見ず、仁術の精神は殆んど地を拂うて居る。其の弊は婦人小兒貧困の病者に對して、最も甚しきを見るのである。此の惡弊を匡救し、殊に婦人小兒の心理生理を觀察研究して、男子の及ばざる隱微の境に入り得るは、女子の特長である。されば男子と共同して、身心を苦しめつゝある病者の爲めに奉仕するは、最も女子に適當にして、おのづから其の賦性の長所を發揮すると思ふのである。

その他、一般婦人界に衛生の智識の普及を圖り、家庭學校社會の衛生効力の増進、人種の改良、國家の兒童母親の保護、傳染病防禦の効力増進、衛生委員、視察委員の養成、女子教育の指導等は、亦女子の醫師の適任にして、之れやがて女子が國家功率の増進に貢獻する、有益なる天職である。而して女子醫學として適當なる専門は、小兒科、婦人科、及び病人食物の研究等である。醫科を中心學科として、之れに關聯して開設すべきは、體育科、藥學科、病人食物及營養科、人種改良學科等である。

今以上の三中心學科と、之れに關聯せる各學科編制の私案を左に掲げて、參考に供することとする。

一 家政學科(理科)

目的、

- 一、高等教育の方法として日常生活に應用せる科學藝術の智識を與へ合理的科學的家庭管理の訓練
- 二、國家及社會の單位としての家庭に對する一般的解釋
- 三、家政學の教師及家政學を基礎とせる一般社會事業の働き手としての準備を與ふることを目的とす

一 家庭科學

一、食品化學

普通食品の成分及び定性定量

×二、同上

特殊食品の定性定量

但し此の科目は研究科に於て研究せしむ。

三、食品生産及び其の供給

食品製造過程、醸造品鑑別、食物保存

四、氣象學

五、園藝學

六、家政學科史

七、食物調理法

食物材料に對する熱冷醱酵の影響

日本料理

西洋料理

支那料理

家庭料理

×調理研究、

病人食物

但し研究科生

八、食物營養論

人體に於ける食物生理的變化、食物營養價保健食料、市價と滋養價

獻立實習、實驗

×九、人體食物必要論

食物新陳代謝實驗、食物必要量研究

但し研究科生

×十、食物經濟

家庭及び國家より見たる食物經濟其の他時事問題の解決

經濟的衛生的食品の研究

但し研究科生

十一、衣服材料

毛、絹、木綿、麻及び織物の化學的取扱、交ぜ織物、偽せ織物の研究

十二、織物製造及び其の供給

各種織物の製造過程其の耐久力

工場參觀

十三、衣服の衛生的品質

各種織物の保溫性、通氣性、有害染色

十四、衣服洗濯、及び汚點拔

和洋洗濯法、其の實習

細菌學を應用して衣類の洗濯に及ぶ

十五、衣服の經濟

收入に適當なる配分を基礎とせる衣服費、贅澤、流行

十六、家屋構造

土地選定、周圍境遇、設計、構造

土地借受及び建築の契約方法

十七、家屋衛生

換氣、暖房、採光、土地下水、上水

通俗的衛生狀態、科學的標準との比較研究

十八、家屋の經濟

收入の適當なる配分を基礎として家屋及び其の設備

家具、借家と自家との比較

×十九、能率増進の家屋設計、研究

但し研究科生

二十、兒童保護

兒童と國家、育兒法、兒童教育

×二十一、兒童保護問題

保育教育の研究

保護科設置

但し研究科生

二十二、生物學的化學

下等生物より人類の營養に及ぶ

成長、自然淘汰及び種屬保存

二十三、家庭細菌學

腐敗醱酵の細菌、衣食住に對する細菌の作用

不衛生なる家庭狀態に於ける細菌の繁殖力

二十四、家政學教授法

教育の目的、教材の選擇、他學科と家政學の關係

教授實習

初等教育に於ける

高等女學校に於ける

カレッジ教育に於ける

二 家庭藝術

一、衣服及び織物の歴史的的研究

- 二、衣服の形及び改良服
實用經濟及び美術的要素を有する衣服の研究
- 三、衣服の調製、繰廻し、廢物利用
- 四、衣服の裁縫
和服
- 洋服殊に小兒服
- 五、色の配合
色の原理、衣服色の取合せ模様等
- 六、刺繡、編物、手藝品
- 七、染色法
- 八、家屋の歴史
東西建築史
- 九、家屋の裝飾
壁、床、家具の色の配合
和洋各室の裝飾法
家具の研究

三 家庭管理

一、家庭起原及び歴史

二、家庭論

結婚、男女心理的基礎、道德的宗教的要素

三、家庭と國家社會との關係

四、家族の法律上位置

親族法相續法より論ず

五、富の消費論

六、家庭と生産者との關係

七、家庭の收入及び増加の方法

八、收入の分配、豫算

九、家庭簿記法

十、買物

小賣市場、共同購買、物品の鑑別、買物實地練習

×十一、生活標準、及び適當なる標準の研究

但し研究科生

十二、家庭労働の有機的關係

十三、家族に對する注意及び奉仕

十四、衛生及び經濟、美的方面より衣食住の管理

×十五、能率増進方法、研究

但し研究科生

×十六、最近の家庭管理問題

但し研究科生

四 家庭看護科

醫學部と連絡を保ち看護學校及び社會事業に携はる人格者を養成す

一、看護歴史及び其の原理

二、家庭看護及び病人介抱其の實習

三、病人食物實習

四、公衆健康の研究、女子健康の増進

五、社會事業、指揮管理

×は研究科生即ち卒業生にして學位の候補者、及び卒業生にして特種の訓練經驗あるものゝために開く

一、理 科

一、經濟學科

一、農 科

一、商 科
一、人類學科

參考資料

シカゴ大學

家政學部

緒言

家政學部に於ける諸學科は

一、高等教育の一方法として社會に於ける家庭の位置に對し一般の見解を與ふる爲

二、社會的單位として家庭の合理的及科學的管理の訓練

三、家庭經濟、家庭科學及家庭藝術の教師となるに適する準備及家政學の知識を基礎とせる各方面に於ける社會的事業の働手とし

ての準備

を與ふる爲に企圖せらるゝものなり。

此學部の正規學科は他の學部に於ける教育者の指定せる他の學課に因て補足せらるゝものにして殊に社會學、化學、動物學、物理學、細菌學、教育學（家政學部生徒の要求に適するやう應用せられたる）等に就ては特別の注意を拂はざるべからず。學生にして特殊の働きに對し準備せんとし、又一定の働きに自己を順應せんと欲するものゝ學科の選擇に付き教育者は其指導に與るべし。

此等の學生に對して特別の證書は與へざるも其學科終了の證明は要求によりて與へらるべし。

家政、食堂管理、買物、家計整理及此に類似の働に付き實際的經驗を得るの機會を與へらるべし。其他教室に於ける教育の補充として慈善事業に参加するの機會屢々あるべし。

家政學部クラブは時々必要なる問題の討論、教授學生間に擔當せる研究の結果を發表、及正規學科以外の必要問題に付き其道の人の説を聞く事あるべし。

通信教育によりて或種の學科は與へらるべし、家政學部の諸學科は左記六種の學生に與へらるべし。

1 大學部卒業生にして更に進みたる研究を遂行せんとするもの、マスター及博士の候補者は此等最高等位に對する大學規則に従ふべし。

2 四年生にしてシカゴ大學及其他大學の三年生所定學科を完了せしものは家政學部バチエラー學位の爲に主專攻又副專攻科を擇び又自由選擇として此學科を撰び得べし。

3 大學三年生にして認可の學科表より十五ユニット (Credit) 授與を許されたるものは規定の學科と共に家政學部中の或る學科を擇び得べし。

4 教育學部の生徒にして四ヶ年の學課に登録しバチエラー學位を得んとするもの。

5 教育學部の生徒にして家事經濟科二年の證書を得るの候補者。

學科の組立

家政學に於ける學科組立は次の學科より擇び得べし。

一、普通細菌學

二、公衆衛生

三、有機化學初歩

四、家族論

五、小賣市場の有機組織

六、富の消費論

七、貧民家族の救濟

八、家族に對する公の見解

九、法律上及經濟上に於ける婦人の位置

十、小兒と國家

十一、家庭管理の問題

十二、家庭經濟の要素

十三、家屋の衛生

十四、食物供給と飲食論

十五、家屋の管理

十六、家庭管理の最近問題

其他教育學部に於ける家庭經濟部及家庭藝術部の諸學科は教授及家政學部長の賛同を得て擇び得べし。

家政學部に於て主專攻學科を取りつゝある生徒は最初に於て次の學科を修めざるべからず。尙學監の承認を経て其二科目は主專攻科目を組織するために擇べる九科目中に組み入れ得るものとす。

無機化學、生理學初歩、經濟原理、市民政治等。

第二組立

一、生活の標準

家庭經濟の要素、家屋の管理、小賣市場の組織、富の消費論、貧民の救濟、家庭の公の見解、家庭管理問題

二、社會及政治的單位としての家庭

家庭の立場より見たる家政、家屋の衛生、家庭經濟の要素、家屋の管理、家庭の公の見解

三、家庭の立場より見たる家政

家屋の衛生、食物供給及飲食論、家庭經濟の要素、家屋の管理、家庭の公の見解

6 學位に關係なく是等の學科を學修せんとする特修生。

かゝる生徒は少くも廿一歳以上にして高女四年を卒へ、又は是と同程度にして物理又化學の何れかを含める學科を修めたるものならざるべからず。

特修生は其望みにより何れの學科をも擇び得べし。従前の素養の十分なるや否やの決定は其の選擇學科の教授に委任す。

教授學科

一、小賣市場の組織

學生をして主婦たるものゝ直接交渉する賣買上の機關に親ましめんとする學課なり。代表的の市場の參觀

二、富の消費論

生活の標準、生命及能率に對する必要、慰安、警澤、奢侈、最少勞銀と生活的勞銀、貯蓄及消費、生産を支配すべきやう消費者の連絡せる運動

三、貧困家族の救済

四、家庭に對する公の見解

家庭と州、聯邦、市の權威等により代表されたる公との關係を檢査せしむ

五、婦人の法律上及經濟上の位置

財産上の婦人の位置、結婚の影響、小兒監理の分擔、賃取及生産者としての婦人の機會

六、小兒と國家

七、家庭管理に於ける問題

此學科は教師社會事業の働き手、科學的主婦としての特別の訓練及經驗を有する學生にのみ與へらるゝものにして之れ深く登録前教授と談合すべし。

八、家屋衛生

健康の要素として家屋を取扱ふものにして、特殊なる注意が最近の清潔の意味に拂はる、通俗の意味の衛生的境遇及科學的標準より見たる衛生的境遇の研究、團體家庭（學校の要求する特別なる例證を以て）

九、食物供給及飲食論

食品の滋養及其價、食物に對する火の影響、食物價造品、保存法、食物の衛生的及經濟的見解、食物に對する通俗的誤解

十、家屋の管理

收入の適當なる配分及適當なる標準の維持等の見解を以て家屋の整理及管理其他家庭奉仕の問題を論ず

十一、家庭管理の最近問題

獨立に研究を遂げ得る生徒にのみ課せらる、確實なる科學的基礎に於て家庭管理の問題の解決を助くる最近及未解決の問題を取扱ふ

十二、種々なる特別問題の研究

特別なる訓練と經驗を有する生徒にのみ開かる

二 宗教科(文科)

學科目

第一部

一、倫理學

二、宗教概論

三、宗教心理學概論

第二部

一、教育學及教育心理學

二、宗教心理(學科に青年期の精神的動機―個人的と社會的―)

三、自然研究

第三部

- 一、東洋宗教史〔文明史並に宗教的偉人の傳記に〕
- 二、西洋宗教史〔關聯して〕

第四部

一、宗教哲學の諸問題

例 空海、王陽明、中江藤樹、平田篤胤、ポーロ、アウグスチン、カント、シユライエルマヘル、コント、ゼー
ムス、ベルグソン、メーテルリンク等の宗教認識論及信念の經驗

第五部

一、宗教の社會的問題

- 一、宗教と道德及經濟の關係
- 二、宗教と社會との關係
- 三、宗教と教育との關係
- 四、宗教と科學との關係

第六部

一、宗教と藝術

一、宗教と文學

二、宗教と神話

例 女神の位置 神仙譚 婦人と平和的思想 婦人と罪惡との關係 動植物並に生殖に關する神話等

三、宗教と音樂

四、宗教と美術

第七部

一、應用問題

一、宗教の信條、儀式、救濟の發達史及批評

二、家庭に於る信念涵養

三、幼稚園及小學校に於る信念涵養

四、高等女學校及中學校に於る信念涵養

五、高等教育と宗教信念との關係

六、社會改善事業

設備

宗教研究に對する博物館の設置、神道儒教佛教基督教等の研究の參考品地圖古物寫眞必要なる書籍等の設備

一、文科

一、社會學科

一、教育科

一、美術科

一、音樂科

三 醫 科

一、解剖學及組織學

二、生理學

三、醫化學

四、病人食物及營養學

五、病理學及病理解剖學

六、藥物學

七、處方學

八、診斷學

九、婦人科學——及外來患者臨床

十、產科學——及外來患者臨床

- 十一、内科學——及外來患者臨床
- 十二、外科學——及外來患者臨床
- 十三、眼科學——及外來患者臨床
- 十四、耳鼻咽喉科學——及外來患者臨床
- 十五、皮膚病學、黴毒學——及外來患者臨床
- 十六、精神病學——及外來患者臨床
- 十七、小兒科學——及外來患者臨床
- 十八、齒科學——及外來患者臨床

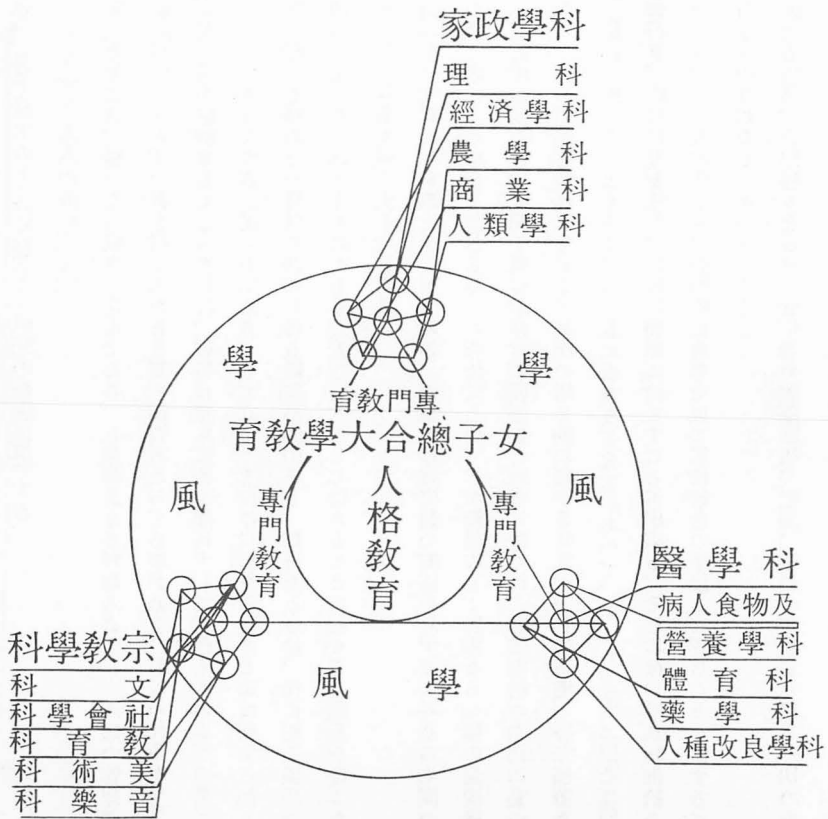
一、藥學科

一、病人食物及營養學科

一、體育科

一、人種病改良學科

女子に高等専門教育を授くる緊要なる理由は以上の説明を以て盡きたるものにあらず、今後文明の進歩に伴うて、人生生活の状態に革新を來たし、徒らに舊來の風習を墨守することを許さず、社會の制度家庭の組織、男女の職業等、總て自ら新面目を將來するに至るは、蓋し世界の大勢の趨く必至の現象と言はねばならぬ。而して其の徵候は今日既に洋の東西を問はず、社會の各方面に現はれつゝあるのである。我が國女子の高等教育に考慮を致すもの、須らく此の新形勢に着眼して、其の方針を定め、女子の性能を發展して、新氣運に適應せしむるの策を立つるを要す。然らざれば、遂に世界の大勢に後れて落伍者たるの非運に遭遇するの日あるを憂ふるのである。終りにギルマン夫人の



説の一端を紹介して、女子將來の生活に關する研究の參考に供する。

ギルマン夫人の所見一端

抑今日の煩雜なる家庭事務には、種々なる職業を含んでゐる。元來善良なる料理人必ずしも理想の管理者ではない、善良なる管理者必ずしも完全無缺の掃除人たらず、善き掃除人たるも賢き購買者たらざる事がある。是等の仕事が分業となりて自由に發達し、婦人は其の一を擇びて其の業を修練することゝなれば、彼等は常に家庭を離れずして、而もその専門の業には有力なる貢獻たるこゝとが出来らうであらう。……さうして若し婦人が生産者として立つときには、自然母親たる事に適する如き者を擇ぶであらう。社會には、家事よりは寧ろ母たる務めと一層能く調和し得る職業が澤山ある。抑母たる事は、稀に起る偶然の事にあらずして、婦人共通の義務、婦人共通の光榮とも云ふべきものである。若し婦人にして母たることに適せざる職業を擇ぶならば、自然はその不變の働きによりて、徐々に其の職業を減じ去るであらう。

争鬭を事とする未開の夫、家事のみを事とする未開の妻、兩親とは唯肉體の關係を有するのみなる未開の小兒——斯かる人々のためには、食事を共にする事は互の結合を固むる唯一の方法であつて、又簡單にして無害なる一種の温情機關として彼等には最上の方法である。けれども近代の如くに、人間の個性が非常に發達した社會に於ては、家族生活の幸福和樂の思出は、必ずしも食卓と聯關したものではない。却つて悲喜何れにもせよ、甚深の情を胸に藏する時は、一日に三度平靜無頓着なる全家族と食を共にする事は、一種堪へ難き壓迫を感ずることもある。若し茲に善良なる食堂があつて、廣く各方面の需要に應じ得らるゝものあらば、一家打ち集ひてそこに行き、時には宴を張り、時には簡單に濟ますことが出来る。それには、唯食物供給の道を着實に講究し、至極簡便に辨ぜらるゝことゝ、一方人の要求も、強制的に食事を以て家族結合の手段とせざることを欲するに至つたならば、斯かる方法は自然に實行せらるゝやうになるであらう。……

現今の一般人の野鄙なる生活、分別盛りなるべき壯年者の放蕩無頼、肥滿、纖弱、食事より起る一切の病氣——加ふるに品性の

癡痺——斯かる病的現象の基を廣く探れば、畢竟飲食に對する見解を誤り、飲食をば家族の機能となしたるに起因して居る。故に飲食の事をして斯くまで不自然なる状態に陥らしめたる、兩性の經濟關係を絶たしめなば、之より吾等の内にある自然力は、漸く純粹に、それ／＼専ら固有の作用を營むやうになるであらう。

新育児法とは何ぞ——勿論母の心、母の手腕といふことは、如何なる場合にも其の任を果すであらう。其の柔和其の親切は、何を以ても之に代ふるものはないのである。併し又他に他人の手も借らなければならぬ。……幼児が同年の友達が有したるときの歡喜は非常なるものである。……多勢の群に入りて十分に交情を温むれば、兒童は知らず／＼我々は人類なり、吾等は同等の生物、同等に斯く養はれ、斯く監督されて居ると悟るに至るものである。……驟ぐにも遊ぶにも、自由といふことを學ぶであらう。斯くて一定の長時間内は、平穩に平等に公共の心を養はれるのであるから、かの一人の家庭にて育てらるゝ、所謂一人子の熱狂、若くは多數の年齢能力相異なる兄弟姉妹の充滿せる小兒部屋に演ぜらるる專横、強奪、屈從、排斥等に煩はさるゝことはなくなるであらう。又母としての方面から考へると、單に我が子といふ見解ばかりでなく、我が子の傍には多數の他の幼兒を見慣るゝにつれて、自然幼兒の普通性に就きて、幾分か學ぶ處もあらう。又人生の此の時期に就きて、理解することも少くないであらう。又他方には、所謂子を思ふ闇に迷ふなどといふことなく、公平に各兒童の特性を認めて、以て母の重大なる任務に就いても、新觀念を得るに至るであらう。……婦人が協力して幼兒保育のために有機的團結をなし、育児の各方面の仕事に分擔して、博き愛を以て賢き良法を講じて、その育児の任を全うするといふことより勝れて、人類幸福の道を進むるものは、何物も他にないのである。

八 女子教育改善策

以上各項に於て論述したる趣旨に基き、茲に女子教育改善に關する當面の問題に就き、意見の要領を擧ぐれば、

(一) 國民教育の徹底

學校と家庭及び社會國家と、聯絡脈絡を缺くが如きは、教育上の浪費にして、其の功率を擧ぐる所以にあらざるは、論ずるまでもなきことである。學校は今後一層家庭及び社會國家の連鎖となり、國民生活に於ける女子の訓練修養を徹底せしむるやう力を致さぬばならぬ。

寄宿舎を有する學校に在りては、特に之れを家庭及び社會國家の縮圖とするを要す。即ち兒童生徒を家庭の一員とし、社會國家の一員と見做し、且つ自ら之れを自覺せしめるにある。學校の校風醸成、學習研究の共同、品性陶冶の責任、皆各自の分擔なるを自覺せしめ、同情協力相助け相勵まし相感化して、自治の精神に基きて學校の理想を實現し、日常生活に於て社會國家に對する義務心と愛國心を涵養し、犠牲奉公の精神を培養し、活動の意志を練磨し、以て善良なる國民たらしむる學風を振興し、健全なる雰圍氣を充滿せしむるを要す。

然も之れと同時に、其個性と適能の發達を指導助長し、自動的學習自治的生活の氣風と興味を啓發し、獨創的能力を養成し、敬虔なる信念、高尚なる人格を涵養し、各自の天職を自覺せしむるの訓練を怠つてはならぬ。

(二) 國民教育と補習教育

女子は國民の一半を占め、平時にあつては、家庭を中心として社會の運命を擔任し、一朝有事の際は、男子と共に協力し、或は男子に代りて、國民の義務を盡すべきであり、又一家逆境に遭遇する場合には家庭の維持、兒女の教育等に於て、男子同様の任務を負擔すべき事は明である、且つ今次の大戦は、一層女子の社會に於ける位置を、吾人の

眼前に示しつゝある。女子をして、此の任務に堪へ得る能力を養成せしむるは、今後の女子教育に於て忽かせにすること能はざる喫緊事である。故に男子が國家に對して、一齊に兵役の義務を負擔すると同様、女子も國民として、小學校終了後（進んで高等の教育を受ける者の外は）或る年限の内に少なくとも、一ケ年以上の補習教育を受けしめ家政學を中心とせる實務教育を授け、之れによりて國家に對する義務、婦人の天職に對する本分を全うするの能力を養はしむるやう獎勵する方針を取らんことを望むのである。

(三) 女子普通教育の徹底的統一

各學科に於て、動もすれば孤立して他を顧みざるの弊は、容易に其跡を絶たざるものがある。是れが爲に、知識をして斷片的ならしめ、心身諸能力諸活動の調和的發達を妨ぐること多きは、學校を卒へたるものに、通じて見るとこの病患である。故に知識の聯絡同化、學理應用の興味、自發的活動、研究發表の習慣、共同生活の趣味等を養成し、品性涵養の學風を振作せんが爲め、兒童の實生活に密接の關係ある家政學に重きを置き、家庭生活に對する思想、興味、實行を中心として他の學科を之れに聯絡統一すべきである。即ち學校及び家庭の生活に於て、意志の鍛鍊と學理の應用とを教養指導し、其の發達の程度に従ひ、漸次其の關係を社會國家及び人道に擴大順應するに至るやう、教育の徹底を期せねばならぬ。茲に謂ふ所の家政中心主義なるものは曾つて教授法に於て唱道せられたる如き機械的の中心的統合法とは全然其類を異にするのである。

(四) 高等女學校

高等女學校の修業年限は、五ケ年を本則とし、地方の情況に應じて、伸縮を自由ならしめ、五年以上の高等女學校

は、上級に於ては分科的となし、卒業後尙進んで高等の教育を志望する者と、卒業後直ちに家庭に入り或は職業に就く者とに對し選擇の自由を與へ、各之れに適切有効なる教育を施すは、最も時代の要求に應ずる制度なりと信ずるものである。

但し從來の實科高等女學校は之れを廢し、土地の情況により、或は之れを高等女學校に改め、或は一種の職業學校に改むるは、却つて其の目的を貫徹するに適切なりと認むるのである。

(五) 女子高等學校

高等女學校卒業後、尙進んで高等の教育を受けんことを志望する者の爲め、女子高等學校を置き、其の修業年限は二年若くは三年とし、高等女學校四年の課程を修了せる者を入學せしむる場合には、其の修業年限を三年とする。

此の外、特に高等女學校の教育と聯續して、其の上に二學年を置ける、通じて修業年限七年の女子高等學校を置くことを得ることとする。

女子高等學校に於ては、基礎として、高等普通教育即ち修養教育 (Culture) を授け、其の上進するに従ひ、適切な部門學科に集中學習せしめるのである。

(六) 女子専門學校

女子の特能を發達せしめ、天職の自覺に確信と興味を得せしむる専門的知識技能を授くる爲め、女子専門學校を置く。其の修業年限、入學資格等は女子高等學校に同じ。

現時に於て最も必要な専門學校をいへば、家政學専門學校の如き蓋し其の一であらう。

(七) 女子大學

女子の賦性天職に鑑み、我が國情に照らして、女子大學は家政學科(理科)宗教科(文科)及び醫科を中心として、他の學科を聯絡配當し、之れを女子綜合大學とし、其の一分科を設け、上に研究科を有するものを、女子單科大學とするのが適當の制度である。

女子大學の修業年限は、五ヶ年高等女學校卒業生を入學せしむる大學は、五ヶ年とし、女子高等學校及び七ヶ年高等女學校卒業生を入學せしむる者は、三ヶ年以上とする。

但し醫科に於ては四ヶ年とする。

尙男子大學に於ては、一定の條件を設け、女子大學に對し研究其他の便宜を與へ、且つ入學資格を有する女子には、其の入學を許可するの道を開くべきである。

(八) 女性人格教育の徹底

女子教育を通じて、一層女性に適切なる人格教育を施すことに留意し、信念の涵養、賦性の發揮、及び責任の自覺を徹底せしめんことを要するのである。

(九) 女子の體育の徹底

教育に於て、體育の重視せざるべからざるは、何人も之れを認むるところなれども、實際に於て其効果を擧ぐるは容易の業にあらず、從來の學校教育に於て、動もすれば學生の健康を害するの弊があつた。然れども女子教育に於て

は、女子自身の爲めに、將た次代國民の母として、殊に體育の忽がせにすべからざるは論を俟たないのである。其の根本的の解決として、教授法の改善、試験制度の改善、學校衛生の改善、運動休養の知識と、之れが實行の習慣を養ふことを要する。女子の教員並に學生に對して、相當の方法を定めて、體力休養の公休を與ふる制度を設くるの必要もあらうと思ふ。女子の體育は女子教育改善に關して、徹底的解決を要する重要な問題である。

(二) 女子視學

女子教育の改善進歩を計り、且つ之れを有効適切ならしめんが爲めに、學力識見あり、創始力に富み、構成力を具ふる女子を視學に任用するの制度を置かれんことを望む。

(大正七年九月出版)